

筑波山における観光空間の形成と変容

－山麓門前町の地域変化に着目して－

猪股泰広・曾 斌丹・岡田浩平・加藤ゆかり・喜馬佳也乃
松村健太郎・山本 純・劉 博文・松井圭介

本稿では、山岳とそれに付随した門前町を有する地域がいかにして観光空間としての性格を有するようになり、またどのように変容したのかを明らかにすることを目的とした。その際の視点として、本研究では、山岳と門前町の二つの空間スケールを想定し、それぞれの空間スケールにおける各アクターの動向およびそれらの関係性に着目した。筑波山における観光空間の歴史の変遷をみると、筑波山登拝者が増加した17世紀初頭には登山道も整備され門前町が成立した。近代になると鉄道・ケーブルカーの開業や自動車道路の開通に伴い、登山者は大幅に増加した。モータリゼーションの進展とあわせて筑波山は関東圏の日帰り観光地としての地位を確立されたが、一方で宿泊者は減少し、門前町のゲートウェイ機能は失われた。門前町の内部アクターとして現存する宿泊施設と商店・土産物店、筑波山門前町をとりまくアクターとして、神社、行政、観光協会、交通関連企業が指摘された。これらのアクターは筑波山への信仰や観光形態の変化に対して立地や経営形態を順応させるとともに、相互の関係性を変化させてきた。昨今におけるトレッキングブームの到来やジオパークへの登録といった筑波山を取り巻く社会環境の変化に対して、アクター間がいかに連携しながら新たな観光空間を構築できるかが課題となる。

キーワード：筑波山、観光空間、門前町、アクター、ジオパーク

I はじめに

I-1 研究背景

周知のように日本における観光現象は、寺社参詣と深く結びついている。日本における観光の原初形態は、伊勢参りに代表されるような日常生活空間を離れる寺社参詣行動であったとされ、近世においては各地で講が組織され、多くの人々が伊勢神宮を目指した（前田・橋本，2015）。また、現代においても観光目的地として京都・奈良の寺社は日本を代表する人気観光地であり、当該地域は国際的な知名度を有する観光地域となっている。

こうした寺社と関連して発達した集落として、地理学で議論されるのが門前町である。門前町の成立や発達、分布、機能などについて、藤本（1970）

が体系的にまとめている。藤本によれば、門前町とは、神社や寺院への参詣者を対象として旅館、ホテル、飲食店、娯楽施設や、場合によっては宿坊、御師の家などが門前の道路に沿って並んでいる集落を指す。その成立時には宗教的集落としての性格を強く有するものの、多くは都市への埋没や衰退を通じてそれは希薄化したとされ、現代においては観光機能との結合のもとではじめて門前町として存立しうるとされている。日本には約170の門前町があり畿内から瀬戸内といった古くからの先進地に多く分布する傾向が示されている。門前町の規模はさまざまであり、わずか1軒の飲食店兼土産物店兼旅館によって成立するものもあれば、成田や琴平、長野のように大規模なものまで存在する。

松井（1993）に基づいて、地理学における門前町研究を概観すると、門前町の形態や発達過程、位置、分布、都市構造、土地割り、家屋構造と、その現代的意義や現代社会への適応などが中心課題とされてきたことがうかがえる。1950年代までは、田中（1933）や藤岡（1948）、原田（1957）による、寺内町や門前集落における景観的特色に関する研究が主であった。これに対して、1960年代から1980年代にかけて、宗教と信仰集落の成立過程に関する研究が増加した。浅香（1959；1963；1968）は木曽御獄、相模大山における信仰登山集落の形成要因や形成過程を、御師ごしの宗教活動と檀家との結びつきという視点から分析し、富士北口の上吉田、河口の御師町の形態と構造に関する報告を行っている。門前町と御師の活動形態からの考察は、鈴木（1966）や有賀（1971；1972；1974）など、枚挙に暇がない。また、門前町の形態としての山岳信仰集落に関する研究として、西田（1975）や岩鼻（1981；1983；1993；1999）があげられる。なかでも岩鼻による戸隠を対象とした一連の研究は、修験道の色彩の希薄化と農民信仰への移行、さらに交通機関の発達と観光開発がいまわって観光化が促進されたという過程を示した。このような門前町の観光化という視点での研究の潮流は、2000年代以降の研究動向にも現れており、むしろ門前町を観光との関係性のなかでとらえるもの、あるいはまちづくりの観点から考察するものが中心となりつつある。小堀（2001）は大分県の宇佐神宮の門前町を対象とし、地域生態と観光動態の両側面に関する分析を通じて、今後の景観整備や観光振興について考察した。橋本ほか（2010）は成田山新勝寺門前町を対象とし、表参道地区に位置する商店の業種変遷および景観整備事業に着目して、門前町の商業空間としての変容を明らかにした。高橋ほか（2016）は、大津市上坂本の比叡山門前町を対象とした景観分析および土地利用分析を行い、まちづくりの観点から歴史的町並み景観の保全のあり方について考察している。服部ほか（2016）は、箱根・元箱根の観光地域において定量的な土地利用分析を

行い、両者の空間構成における差異の背景として、宿場町と門前町という相異なる由来を指摘した。また、観光やまちづくりへの社会的関心の高まりを反映して、社会学や建築学（都市計画）における研究もみられるようになってきた（尾越・浅野，2013；外村，2016；小椋・樋口，2016；築山・矢部，2016）。他方、上述の浅香や岩鼻が対象とした、山岳信仰集落に代表されるような、山に立地する門前町の観光化に関する近年の研究としては、卯田（2014）がある。卯田はとりわけ都市からの影響を受けやすい都市近郊の霊山を対象として、それらがどのように観光化されたのかを、開発資本の動向を中心とした分析にもとづいて明らかにした。この研究は門前町というよりもむしろ山そのものへの着眼の色彩が強く、また地域外のアクターの動向に関する分析をした点で、従前の門前町研究とは一線を画すものであるといえるだろう。同様に信仰の山と観光の関係性を論じたものとして、松井・卯田（2015）の富士山信仰を対象とした研究があげられる。

しかし、これらの研究が対象としているのはいずれも近世から近代が中心であり、特に1980年代以降の動向については明らかにされていない。他方、現代の山岳をめぐることは、それぞれの山岳が有する宗教性あるいは信仰の程度にかかわらず、自然への関心の高まりや健康志向を背景とした登山ブーム（山形，2013）の影響をうけていると考えられる。また、こうした山岳は往々にして固有の自然的基盤を有する。これは、山岳としての地形を呈する元となる地質的特徴のほか、日本人の聖域観による造林の阻止と、天然林やそれらを含む生態系の保護（長野，1989；1990；1992）の傾向に由来する。したがって、この固有の自然的基盤を観光資源として位置付けたジオツーリズムあるいはジオエコツーリズム（小泉，2011）の進展の影響も少なからずうけるだろう。

それゆえ、山岳あるいはそれに付随する門前町もこうした影響下にあると考えられ、観光空間としての山岳の特性についても既往研究とは異なった一面を有することが予期される。これをふまえ

ると、1980年代以降において山岳と門前町がどのように変容を遂げてきたのかという点を明らかにすることに、研究の意義が見出される。ところで、観光空間の形成および変容のプロセスや諸要因、すなわち特定の地域がどのような作用を受けて観光空間になるのかについて明らかにするためには、その地域を構成する主体（アクター）に関する分析が必要であり、地理学では伝統的にそのような手法がとられてきた（呉羽、2014）。山岳や門前町においては、その核心となる寺社のほか、藤本（1970）が指摘するように、旅館、ホテル、飲食店、娯楽施設などがその対象となりうる。また、卯田（2014）の開発資本に相当する交通関連企業、すなわち鉄道やバス、索道関連の企業も対象として想定される。さらに、近年の自律的観光や着地型観光の相対的地位上昇に伴う、地方自治体の観光への関与の度合いの増大傾向（石森、2001；森重、2009）をふまえると、地方自治体やそれを母体として設立された観光協会などのアクターの動向も分析対象となるだろう。無論、観光空間を利用する主体としての観光者の視点も重要である。

I-2 研究目的と研究方法

以上を踏まえて本研究では、山岳とそれに付随した門前町を有する地域がいかにして観光空間としての性格を有するようになり、またどのように変容したのかを明らかにすることを目的とする。その際の視点として、本研究では、山岳と門前町の二つの空間スケールを想定し、それぞれの空間スケールにおける各アクターの動向およびそれらの関係性に着目する。

本研究の対象地域として、筑波山を取りあげる。筑波山は、その山体を旧来より信仰の対象とする筑波山神社が存在し、門前町が山腹に沿うかたちで広がっている。また、首都圏近郊に位置することから、現代においても一定の観光者数が想定され、彼らの存在によって登山ブーム等の影響が地域に色濃く反映されていることが予想されることから、本研究の問題意識において妥当な対象地域

であると判断される。

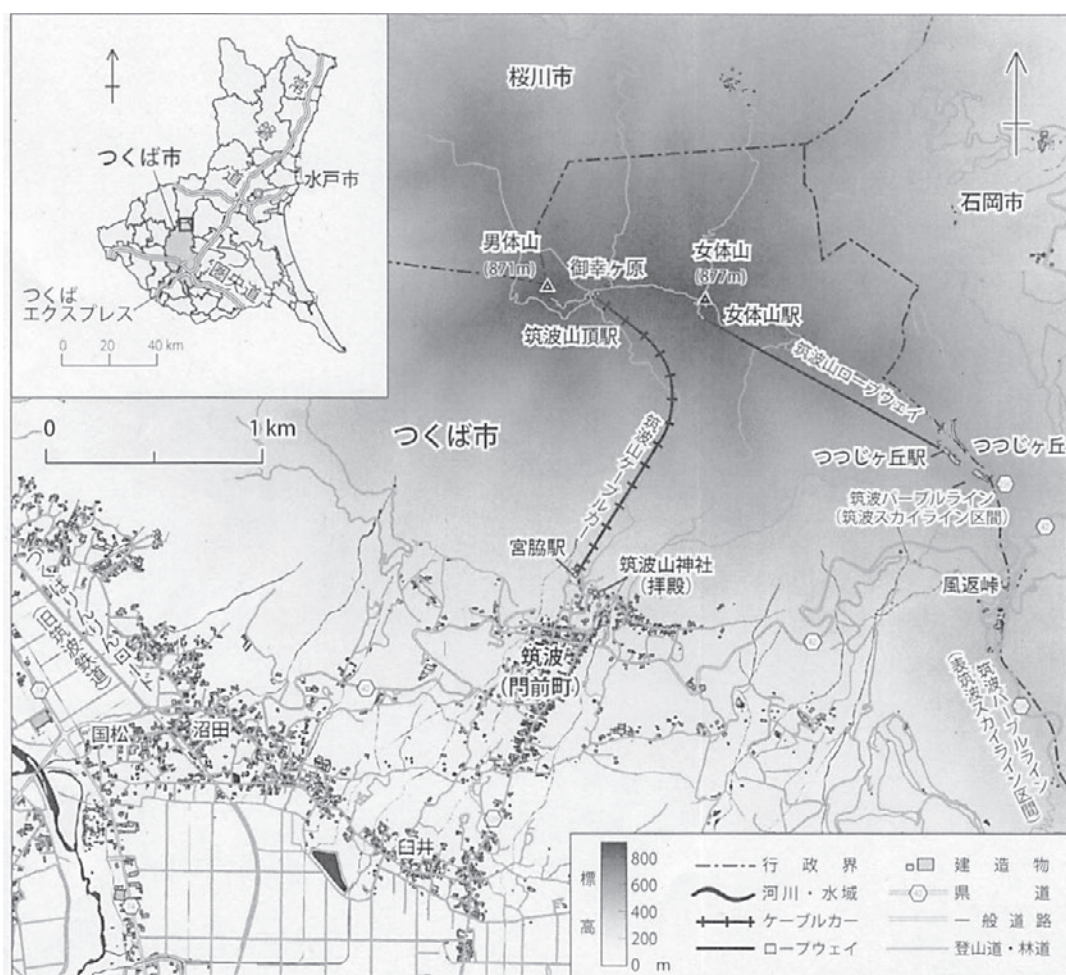
本研究の手順を以下に示す。まずⅡ章において、佐々木(1983)や湯本ほか(2005)、西邑・黒田(2015)などの筑波山を対象とした地理学とその隣接分野における先行研究、郷土資料などの既往文献、および聞き取りに基づいて、筑波山における観光空間の歴史的変遷について整理する。その際、時期区分を五つに設定し、各時期における観光動態ができるだけ把握できるように、交通インフラや観光者の特性に着目して記述した。

続いて、現在において地域を構成するアクターに関する分析をⅢ章およびⅣ章で行うが、本研究では上述のように山岳と門前町の二つの空間スケールを想定するため、この両者を大別することとした。Ⅲ章では、前者に相当するような門前町をとりまくアクターとして、神社、行政、観光協会、交通関連企業の近年の動向および取組みを聞き取りに基づいて示し、彼らが観光資源としての筑波山をどのように位置付けているのかを明らかにする。Ⅳ章では、藤本（1970）の定義する門前町の内部アクターとして現存する宿泊施設と商店・土産物店を取りあげ、それらの立地特性や変化、および経営形態に関する分析を通じて、門前町としての地域的特性を明らかにする。

以上をふまえて、Ⅴ章では筑波山における観光空間の形成および変容の過程とその諸要因を考察する。考察においては、各アクターへの聞き取りから明らかになった筑波山における観光者の特性とその変化をふまえながら、門前町の地域特性および、各アクターの関係性を議論する。最後にⅥ章において、観光の持続性の視点から筑波山観光の課題を導出する。なお、本研究の現地調査は2016年10月、11月および2017年5月、8月に実施した。

I-3 研究対象地域

本研究で対象とする筑波山は、つくば市、桜川市、石岡市の3市の境界部に位置する（第1図）。山頂部がハンレイ岩、山麓部が花崗岩で構成されることにより、関東平野における唯一無二の単独



第1図 研究対象地域（2017年）

峰の景観を呈する（写真1）。山麓南側斜面に沿うかたちで門前町が広がり、江戸時代より筑波山への来訪者の玄関口としての役割を果たした。

筑波山を対象とした自然地理学的研究は数多い。筑波山の気候は、吉野（1982）やUeda et al.（2003）、堀ほか（2006）、植田ほか（2011）の一連の研究からも知られるように、斜面温暖帯の分布が顕著である。これを反映して、ブナ林の南限かつ温州みかんの北限の生育地となっている。

筑波山は3市の境界部に位置するものの、実質的な拠点性はつくば市が有する。筑波山における観光を考えるうえで、つくば市全体の観光資源を

概観する。つくば市は茨城県南でも有数の観光者数がある（第2図）。伝統的には筑波山が市内唯一の観光地としての役割を担ってきたが、周知のように、現在においては研究学園都市としての色彩が強く、各研究機関を巡るような観光形態や各種コンベンションの開催による来訪者も多い。

Ⅱ 筑波山における観光空間の歴史の変遷

Ⅱ－1 黎明期（近世～明治期）

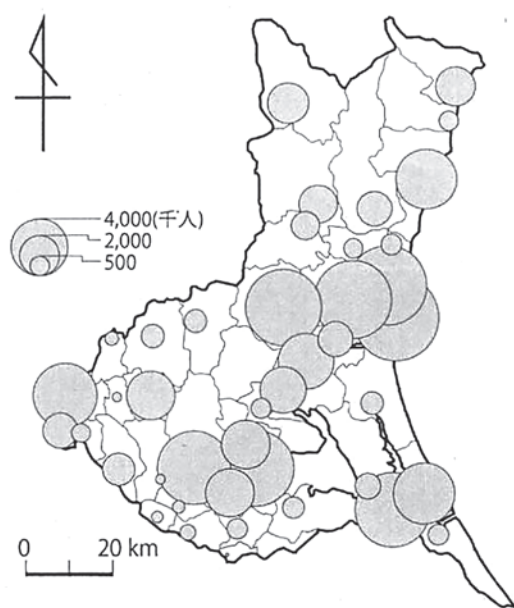
筑波山に関する伝承は、現存する『常陸国風土記』にも富士山と対称とするようなかたちで残されている¹⁾。歌垣の地としても知られ、『万葉集』



写真1 筑波山の景観

双峰をなしており、向かって左が男体山（875m）、右が女体山（877m）であり、両者の中間となる鞍部が御幸ヶ原である。山腹の標高100～300m付近に分布する施設群が筑波地区であり、筑波山観光および登山の拠点となる門前町を形成している。写真右端の稜線上がつつじヶ丘である。

（2006年11月 猪股撮影）



第2図 茨城県内各市町村における観光入込客数の分布（2015年）

（茨城の観光レクリエーション現況（平成27年観光客胴体調査報告）より作成）

に記載された25首をはじめ、歌や俳句において詠み込まれている。女体山と男体山とをそれぞれ神

体とする筑波山神社も『延喜式』に記述のある神社であり、古代からその存在が認められる。平安期には法相宗の僧、徳一によって筑波山周辺に仏教が広められ、知足院中禅寺が建立される。また、特に鎌倉時代には修験者の修行の地としても栄え、関東一円の子岳霊場として機能していた。こうした神道と仏教との混在によって筑波山の信仰空間は神仏習合の様相を呈していた。

江戸時代に入り、徳川家康は江戸の鬼門を鎮護する山として筑波山を信仰し、500石を社領として寄進した。家光の治世には中禅寺の御堂や五重塔、鐘楼、楼門などの造営がなされ、筑波山麓は活気づいていった。この際、中禅寺南方の門前町も開発され、参詣道も整備された。湯本ほか（2005）は絵図や史料を用い、中禅寺門前の山麓に広がる集落地域である筑波地区の近世における建物の変化を読み解き、修繕のための職人町が、旅館屋など二階建ての建物が参詣道に並ぶ門前町に移行していくことを明らかにしており、当時から筑波山への参詣がみられたことがわかる。

1755年に描かれたとされる「常陸国筑波山上画図」及び「常陸国筑波山下画図2）」では2枚に分けて当時の筑波山の様子を見ることができる。前者には男体山及び女体山の山頂それぞれに権現と書かれており、山中には多数の名所が描かれている。また、後者には中腹に位置する中禅寺と、中禅寺門前に広がる店舗の様子が見てとれる。上述の絵図だけでなく、1780年には『筑波山名跡誌』といった筑波山の観光ガイドとして機能するような出版物も発行されており、こうした建築の変化、絵図や出版物の存在からも、近世における参詣あるいは観光の場として筑波山が発達していたことが推察される。

西海（1979）によると、筑波山参詣において御師は存在し盛んに活動があったが、御師集落は発達しなかったという。これについて西海は、筑波山と一般の集落の近接性が高いことから、神社と近接した御師集落のみが発展することがなかったとしている。また、祈願内容が個人的祈願の枠組みを出ないことから、村落を超越したレベルの信

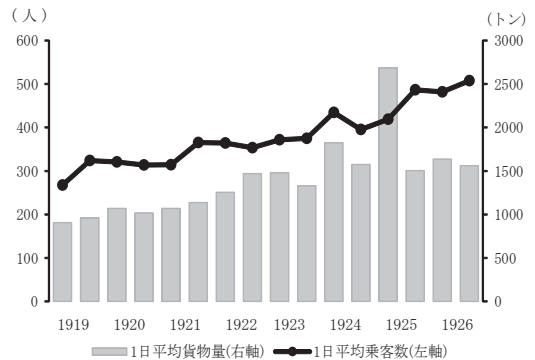
仰組織である講にまで発展しなかったと考察している。加えて、他の霊山に比べ筑波山の登頂が容易であることから、修行的側面というより物見遊山的な側面が強くなってしまったとも言及し、これは門前町に一般客相手の遊女屋や旅籠が盛んに商いをしていたことからもうかがえるとしている。筑波町史編纂委員会（1989：653-654）によると、参詣客相手への商売は、中禅寺南方に麓へ続く六丁通りのうち、特に寺院に近い一丁目から三丁目が賑わっていた。中禅寺東方にあたる東山町にも旅館が栄えていたが、参詣路の変化によって参詣客を取り込めなくなり、衰退していったとされる。

明治に入り、廃仏毀釈運動の中で筑波山の信仰空間から仏教が分離され中禅寺は取り壊されることとなる。その後、1873年には県社とされ、1875年には中禅寺の御堂の跡地に筑波山神社の拝殿が建てられた。

Ⅱ－２ 導入期（大正～第二次大戦前）

１）筑波山へのアクセス方法の変遷

木村（1959）によると、1889年の水戸と小山を結ぶ水戸鉄道水戸線と、1896年の水戸から上野を結ぶ日本鉄道会社海岸線（現常磐線）の敷設により、東京や栃木からの観光者が増加した。しかし、これらの鉄道よりもさらに大きな影響を与えたのが、1918年の土浦筑波間を結ぶ筑波鉄道の開通であった。これにより筑波から土浦まで約50分で行けるようになった。この敷設には筑波山への観光者を誘致するだけでなく、岩瀬地域や真壁地域で産出される石材の運搬という目的があった（筑波町史編纂専門委員会、1990）。結果として、石材に限らずこの地域の花崗岩、土管、生糸、焼物、米などが東京へと運ばれ、筑波山への観光者は増加した（第3図）。1921年下期の旅客輸送実績は前期比で16%、収入が21%と目覚ましい伸びを示した。これは筑波山への登山客が激増したことと、霞ヶ浦飛行場の開場が人気を集めたことによるものであった。景気が好転しないまでも落ち着きを取り戻した時期には、飛行場の珍しさもあり観光



第3図 筑波鉄道開業当時の1日平均輸送実績（1919年～1926年）

注）各年の数値は左が上期、右が下期を示す。

（『関東鉄道株式会社70年史』より作成）

拠点が力を発揮した（関東鉄道株式会社、1993）。

1922年には筑波駅から標高200mの中腹まで自動車道路が開通し、その翌年には乗合自動車³⁾が開業した。これにより、自動車道路の始点である筑波駅周辺には土産物屋や飲食店がずらりと立ち並び、竹藪だった中腹の終点には宿屋や乗合自動車の停留所が立ち並んだ（木村1959）。1925年には、筑波山ケーブルカーが開通した（写真2）。これ



写真2 戦前の筑波山ケーブルカー

（筑波町史編纂専門委員会（1990）より引用）

により、徒歩で3時間かかっていた筑波山神社からの登頂が8分に短縮され、東京から気軽に行ける観光地として定着した(西邑・黒田, 2015)。ケーブルカー開業当時には、実現を見ずに終わった筑波登山電車に代わり、株式会社筑波自動車商會を設立して筑波駅と筑波山神社間に乗合自動車が運行した(第1表)。ケーブルカーは観光登山バス(乗合バス)とともに、短期間ではあったが筑波鉄道の旅客誘致に貢献した(関東鉄道株式会社, 1993)。関東で2番目にできた筑波山ケーブルカーは、関東初の箱根よりも首都に近く、国鉄が同年5月から上野～筑波間に臨時直通列車を運行したこともあり、筑波山人気を一段と高めた。筑波鉄道開通以降はほとんどが土浦から筑波鉄道で北条または筑波まで行くルートを紹介している。実際は北条駅よりも筑波山に近い筑波駅を使う登山客が増え、つくば道の利用客が減ったため、北条の町は寂れていくこととなった(木村, 1959)。一方で筑波駅～筑波山神社の道は栄えたものの、交通機関の発達により滞在時間が短縮され、筑波町の旅館は宿泊客が減少した(西邑・黒田, 2015)。

2) 登山道の変遷

明治以降、筑波山山頂までは筑波山神社→御幸ヶ原→男体山→女体山→白雲橋→筑波山神社を辿るルートが主流であった。1925年には、筑波山の観光振興のために地元の資本家たちが筑波山神社から御幸ヶ原までをつなぐ筑波山ケーブルカーを開通させた。これは、麓から御幸ヶ原へ至るコースの行程にかかる時間を短縮させるためのものであり、筑波山神社を出発して、男体山、女体山を経て神社に戻る従来のルートに変化はなかった。

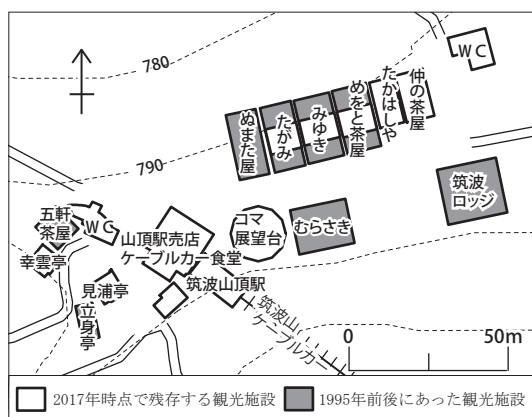
3) 観光資源

明治から大正にかけての旅行記には、山中にある茶店についての記載が目立つ。その中でも「御幸ヶ原の五軒茶屋(五亭)」と呼ばれる5軒の茶屋は有名で、男体山から女体山へ行く際の休憩場所として栄えた(第4図)。その後、五軒茶屋は1918年には5軒から2軒に(大塚, 1918)、1923

第1表 筑波山の観光に関する歴史

期	年	出来事
導入期	1914	筑波鉄道(土浦-筑波間)開通
	1917	標高200mまで自動車道路開通
	1918	乗合自動車の開業
	1925	筑波山ケーブルカー開通
	1926	筑波自動車商會設立 タクシー開業
	1927	筑波自動車商會 バス(沼田-神社前)の運行開始 第二次世界大戦中 ケブルカー撤去
発展期	1954	ケーブルカー復旧 上野-筑波間で毎週日曜日に「自然科学列車」が運行
	1958	筑波駅前に観光会館ができる
	1960	筑波駅-筑波山神社に登山道路(2.3km)完成 沼田から筑波山神社までの観光道路が完成
	1963	筑波山に町営駐車場が完成
	1965	筑波山神社-つつじヶ丘に筑波スカイライン(4.4km)完成 つつじヶ丘に大駐車場 つつじヶ丘-女体山間にロープウェイ(1.3km)完成
	1966	梅林造成
	1969	水郷筑波国定公園に指定 男体山を1周する「筑波山自然研究路」(1.5km)完成
	1971	桜山キャンプ場完成
	1974	第1回筑波山梅祭りが行われる 風返し峠-朝日峠間に表筑波スカイライン(10km)完成 つつじヶ丘-不動峠経由-朝日峠間にパープルライン完成
	1982	神社脇に大駐車場完成 常磐自動車道(谷田部-千代田石岡間)開通
	1985	つくば科学万国博覧会が開催された
衰退期	1986	筑波山山頂付近の境界線訴訟(真壁町・筑波町)に判決
	1987	筑波鉄道(土浦-岩瀬間)廃止 筑波山観光センターが開館 つくば市発足(豊郷町、大穂町、桜村、谷田部町の4町村)
	1988	筑波町がつくば市に編入
	1994	筑波山クリーンハイクが開始
	2000	筑波山の標高が875.9mから877mに変更
	2001	筑波山頂カタクリの花まつり開始 筑波山温泉が開湯
	2003	つくばJCT開通により圏央道と常磐道が接続
	2005	つくばエクスプレス(秋葉原-つくば間)開通
再編期	2010	圏央道(つくばJCT-つくば中央IC間)開通
	2011	東日本大震災 福島第一原子力発電所事故発生
	2015	圏央道(神崎IC-大栄JCT間)開通
	2017	圏央道(つくば中央IC-境古河IC間)開通

(筑波町史編纂専門委員会 (1990), 筑波山ケーブルカー&ロープウェイWebページ, 筑波山江戸屋Webページより作成)



名が注目を浴びるようになった。これに合わせ、筑波山の旅館は改修や商店の整備、万博会場への出店をし、いばらきパビリオンでは筑波山神社のお祭りなどを紹介して筑波山を宣伝した。万博以降、茨城県南部の中心地は土浦からつくばへと移行していった。これは筑波山へのアクセスが、土浦経由からつくば経由が主となっていったことを意味する。減少傾向であった筑波スカイライン及び表筑波スカイラインの自動車通行台数は、万博を通じて回復に転じた（第5図）。

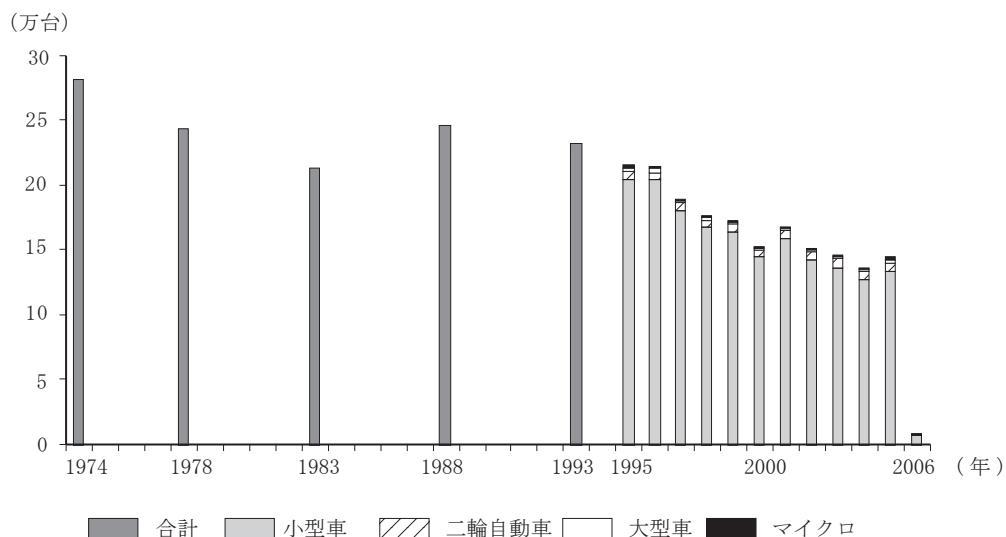
2) 登山道の変遷

1954年にケーブルカーが復旧した後、自家用車の利用客の増加に伴い1965年に筑波スカイラインとロープウェイが完成した。これにより、徒歩と交通機関を組み合わせた「つつじヶ丘→（ロープウェイ）→女体山→御幸ヶ原→男体山→（ケーブルカー）→筑波山神社」というルートが可能となった（西邑・黒田，2015）。それまでの比較的緩やかな男体山から登るルートとは反対であることが特徴であった。一例としてつつじヶ丘大駐車場からロープウェイで女体山頂に登り、男体山には行かず徒歩で下り、車で筑波山に行くルートが紹

介されている（日本交通公社出版事業局，1980）。このように、つつじヶ丘と女体山をつなぐルートができたことで新たなルートが作られた。1969年には筑波山の自然観察のための男体山を一周する「筑波山自然研究路」が完成し、同年には筑波山が加波山地域と共に「水郷筑波国定公園」に指定され、自然豊かな筑波山が注目され始めたと考えられる。

3) 観光資源

戦後の文献において観光資源として多いのは「がま」関連である。つつじヶ丘に「がま洞窟」というテーマパーク、筑波山神社の西側に「がま公園」が造成されるなど、高度経済成長期に筑波山で多くの観光施設が建設された。有名ながまの油の口上は近世に香具師の永井兵助が始めた説もあるが、これまでの研究では昭和以降に広がったものとされている。がま公園は現在閉鎖されているが、1966年の「筑波山麓合唱団」という歌は筑波山とがまとの結びつきを広く示すものと考えられ、2009年に「がまの油」という映画が公開されたことも含めて、「筑波山=がま」というイメージは今後も人々に根付いていくと考えられる。ま



第5図 筑波スカイラインにおける自動車通行台数の推移（1974年～2006年）

注）2006年4月27日から無料供用開始にともない、通行台数のデータは収集されていない。

（茨城県道路公社提供資料より作成）

た、山でキャンプをするという近代的な登山の傾向も見られるようになり、桜山キャンプ場は今ないが、つくばふれあいの里（臼井）やつくばねオートキャンプ場（石岡市）などがある。その他にも、1969年には筑波山中腹に国民宿舎つくばね（石岡市旧八郷町）がオープンした（八郷町史編纂委員会、2005）。同時期には春と秋以外にも観光者を誘致するため、1966年に筑波山神社の西側に梅林が造成され、1974年からは毎年梅まつりが開催されている。

Ⅱ-4 衰退期(1980年代後半～2000年代前半)

1) 筑波鉄道の廃止

競合する日帰り観光地域が関東圏に多数形成されたことや景気の後退をうけて、筑波山を訪れる観光者数は減少した。戦後から1980年代前半までは筑波スカイラインの開通やパープルラインの開通など自動車交通網の発展、駐車場の完成にともない、筑波山へのマイカーでの来訪者が増加する要因が多くみられた。その一方で、筑波山と土浦を結ぶ筑波鉄道の輸送人員数は1965年の413万人をピークに以後一貫して減少し続けていた（第6図）。筑波鉄道はこうした厳しい事業環境のもと経費削減、省力化対策として一部駅の無人化、通

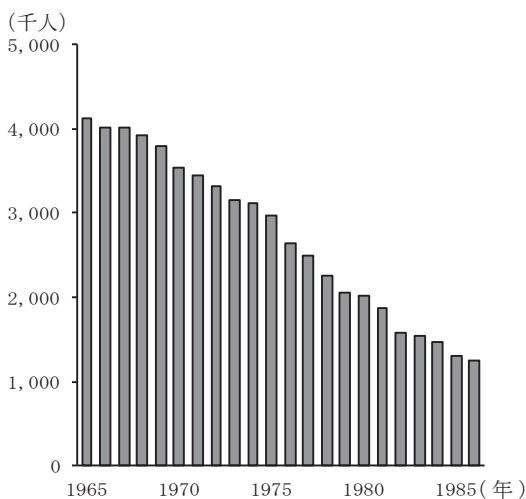
信線のケーブル化や人員削減などにより諸経費削減を行ってきたが、乗客の減少に伴う減収と、物価の上昇などによる諸経費の増加は克服できず、筑波鉄道の経営を継続することは困難となり、1987年に廃線が決断された。筑波鉄道の廃止により都心と筑波山を結ぶ公共交通機関空白の時代となった。

また、つつじヶ丘から風返し峠までの区間道路である筑波スカイラインの自動車通行台数も1974年から2006年までの通行台数をみると、1980年代半ばから1990年代初頭まで増加傾向がみられ、それ以降は減少傾向が続いている（第5図）。

つまり、1980年代後半からは筑波鉄道廃線による来訪者数の減少だけでなく、マイカーでの来訪者も減少の一途を辿っていることが指摘できる。これは、観光者がマイカーでの移動手段を持ったことにより、関東圏の他の観光地域への移動が容易となり観光目的地が多様化したことが筑波山観光の表退を招いた原因として挙げられよう。

2) 筑波山温泉の供給開始

このように、1980年代後半から筑波山観光を取り巻く環境は来訪者の減少の一途をたどった。筑波山宿泊施設4件は新たな観光誘致の施策として、共同出資で温泉を掘りだすこととした。筑波山では既に「筑波温泉ホテル」が、個人の出資にて1974年に現筑波山温泉ホテルの敷地内に当時の金額にて2億円の資金を投じて温泉を掘り当てていたが、当時は筑波山全体の観光者増加には至らなかったという背景がある。共同出資で掘り出されていた筑波山温泉は2001年に開湯した。温泉は共同出資を行った各宿泊施設に配湯され、現在も筑波山温泉として観光者に提供されている。筑波山温泉の開湯と同年に「筑波山頂かたくりの花まつり」といったイベントも開始され、これらの変化は表退期に一石を投じる変化であった。しかし鉄道廃止とマイカー来訪者の減少期から、観光者を一気に回復させるには至らなかった。その後、2003年につくばJCT開通により、圏央道と常磐道が接続し、一時は空白となっていた都心と筑波山



第6図 筑波鉄道輸送人員推移(1965年～1986年)
（『関東鉄道株式会社70年史』より作成）

を結ぶ交通の流れに変化があり、観光者数は徐々に回復の傾向となった。

Ⅱ－５ 再編期（2000年代後半～現在）

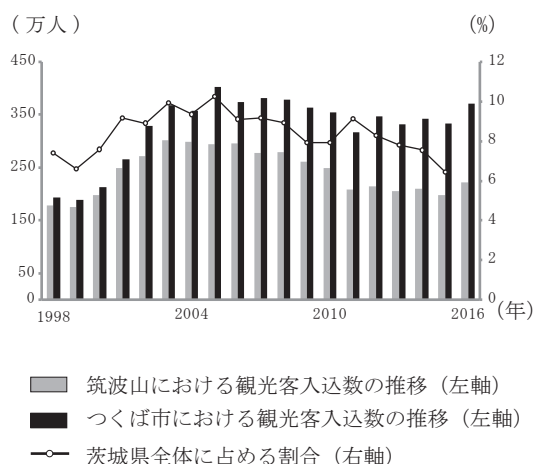
2005年につくばエクスプレス線（以下、TXとする）が開通すると、これを契機として東京方面からの来訪者が激増した。TXの直接的な影響は3年ほどで収束したが、これに続かたちで登山ブームの余波の影響を受け、現在では来訪者の多くが登山を実施している。

第7図には筑波山およびつくば市観光者入込数の推移を示した。つくば市の観光入込客数は、TX開通の2005年度に約400万人に達した。2011年には、東日本大震災の影響で約316万人まで落ち込んだが、その後入込客数は回復の傾向に転じ、2016年時点で年間約370万人となっている。また、観光の中心である筑波山の観光入込客数の推移を見ると、2003年度の約301万人をピークにその後は減少傾向に転じ、2016年時点で約222万人となっている。統計データでTX開通後に筑波山入込数の大幅な増加は見られないが、近年の筑波山きっぷの販売実績と筑波山シャトルの乗車実績をみると、観光者数は年々増加傾向にある⁴⁾。

2000年代後半以降、筑波山への交通、インフラ

の整備等を進めてきた。2005年につくばと秋葉原を45分で結ぶTXの開通で、東京都内や近県と筑波山の繋がりが深くなった。2004年10月1日からは表筑波スカイラインが無料開放になった。2006年4月27日からは筑波スカイラインが無料開放になった。交通整備については、2013年に筑波山神社前に、県道を拡幅し、車両が転回できるロータリーが完成した。これまで門前通りは神社前で行き止まりになっていたが、道路改良によりスムーズなUターンが可能となった。また、2014年7月に市営筑波山第1駐車場の拡充整備工事が完成し、行楽期の交通渋滞の軽減など観光者の利便性向上になった。

また、これらの整備で自動車でのアクセスが向上したことにより、つつじヶ丘駐車場も利用されるようになった。特に春季は行事が多く、利用者も1年の中で特に多い時期であり、大型連休を中心に渋滞も発生している。これらの利用者の多くは普通車で訪れており、個人や家族での旅行客が中心であると考えられる（第8図）。再編期においては筑波山へのアクセスが向上した一方で、観光者数は2008年頃から続いてきた減少に歯止めがかけられ、回復しつつあるとみられる。



第7図 つくば市および筑波山における観光入込客数の推移（1998年～2016年）

（『茨城県の観光レクリエーション現況』より作成）

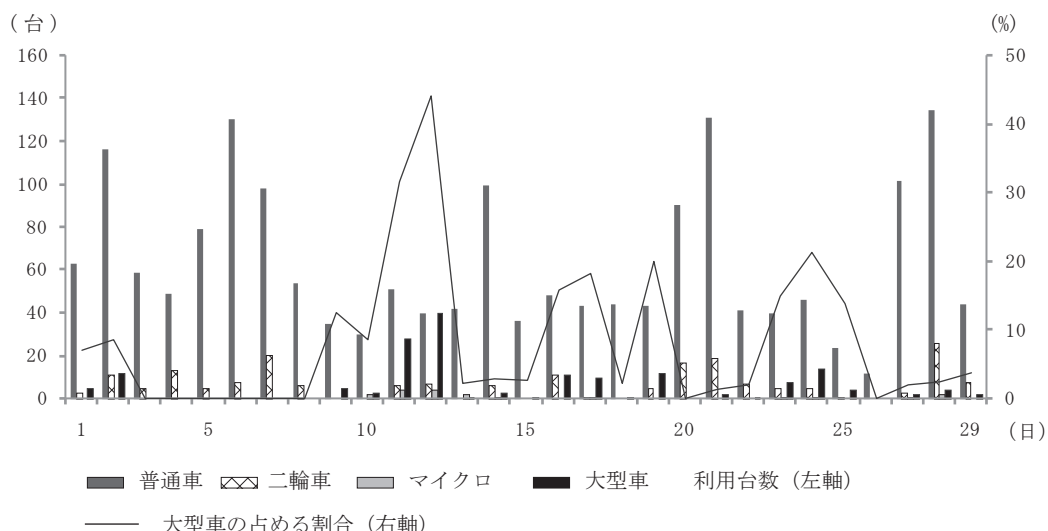
Ⅲ 筑波山をとりまく観光関連アクターの特性および観光への取り組み

Ⅲ－１ 筑波山神社における信仰形態と観光への対応

1) 筑波山神社と氏子組織

筑波山神社は山麓や周辺地域に氏子を抱えており、御座替祭などの祭事が行われる際、役員として補助する役割を果たす（写真3）。西海（1979）によると、筑波山における氏子組織は氏子総代が12人からなり、上大島2人、白井1人、館・六所1人⁵⁾、沼田2人、筑波4人、国松2人で構成されているという。

特に門前町である筑波地区は神社との近接性から関わりが深い。第9図に字筑波内の町分けを示す。組は集落の相互扶助組織や自治団体の最小サ



第8図 つつじヶ丘駐車場の無料利用台数日別推移 (2017年5月1日～29日)

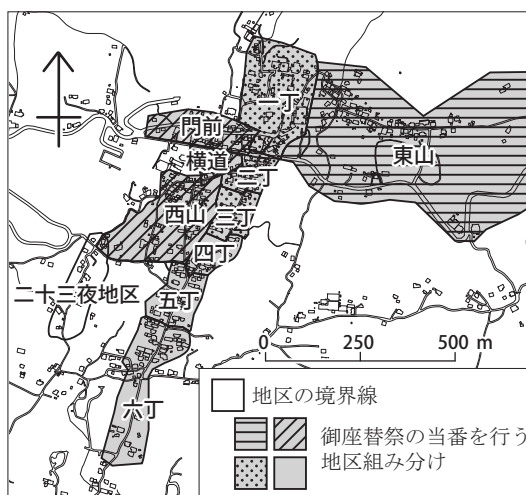
(茨城県道路公社提供資料より作成)



写真3 筑波山神社御座替町 (神幸祭) の様子

毎年4月1日と11月1日に行われる筑波山神社の例大祭である。神衣祭 (かんみそさい)、奉幣祭 (ほうべいさい)、神幸祭 (じんこうさい) の3つから構成される。神幸祭では、猿田彦氏の人物を先頭に、つくば道の一の鳥居から配電まで渡御する。筑波地区の氏子が神輿の担ぎ手となるほか、土浦市など地域外からの担ぎ手の来訪もある。

(2016年11月 猪股撮影)



第9図 つくば地区における氏子町の分布 (2017年)

(聞き取り調査より作成)

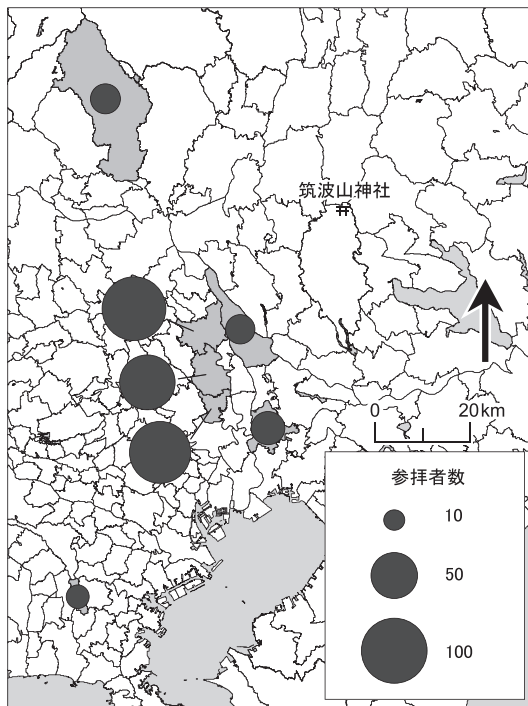
イズの区分であり、特に御座替祭の際、四つの班は毎年交代で当番を行い、御座替祭の運営の仕事を手伝っていた。四つの班は、東山、門前・横道・西山、1・2・3丁目、4・5・6丁目という組み合わせになっていた。しかし、2017年から当番制を行わなくなったという。

2) 講組織による参拝

筑波山山麓の講組織は、ダイドウ講や御無尽講、筑波講として活動を行っていた。こうした講の詳細については、西海 (1979:152) が1973年から1976年に、城 (2002) は2001年から2002年の筑波山周辺の講活動について調査を行っている。

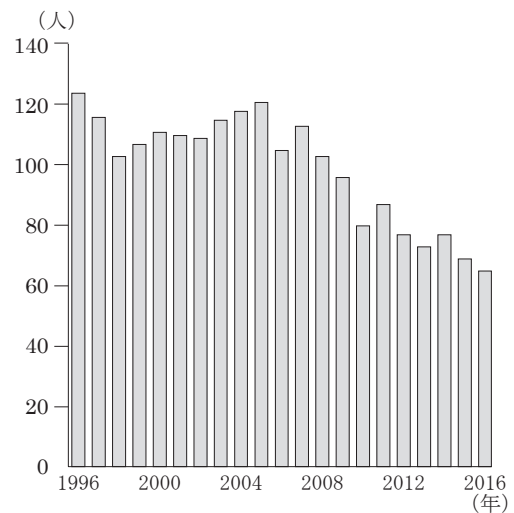
一方、第二次信仰圏を形成するような、遠方の地域から代参を行うような講活動に関しては、西海（2012:32）にて調査が行われており、また信仰圏も示した大当講の分布図も掲載されている。より近年のものとして、2009年時点での筑波山神社に記録のある講組織の所在市町村と人数を、筑波山神社の提供資料をもとに第10図に示した。近隣県からの講組織が参拝していたことがわかる。また第11図は継続して参拝が続けられている講組織の人数を示したものである。この講組織は神社から提供を受けたデータ内では、最も長い期間連続した参拝が継続して続けられている組織である。その参加者は漸進的に減少しており、全国的にみられるように講による参拝は筑波山神社でも徐々に衰退している。

筑波山神社への聞き取りによると、講元の家族が参詣に訪れるなど、個人での参詣行動は続いている例もあるという。また、氏子町などの地元に



第10図 筑波山へ参拝した講所在地と参拝者数（2009年）

（筑波山神社提供資料より作成）



第11図 A講における参拝者数の推移

（筑波山神社提供資料より作成）

住む人々の参詣は現在も続いており、信仰に基づく参拝者の存在は失われていない。

3) 個人の来訪者

講組織での組織的参拝活動は減退傾向にあるが、個人客の参拝は絶えず行われている。この個人客の主な属性は登山客である。筑波山神社によると、近年筑波山域では参拝を行う登山者が増加傾向にあるという。しかし登山者の増加に伴っては、正規の登山道以外を利用する者や傷病者が増加する問題も発生している。また登山にあたって参拝を行わない登山者も多く、神社としては、神の山としての筑波山の性格を尊重した来訪を期待しているという。

また近年みられる登山以外の来訪目的としては、御朱印集めがあげられる。筑波山神社では、若い女性を中心にこうした御朱印集めを目的とした客層が急増しており、新たに摂社の御朱印を追加提供するなどして対応が図られている。

筑波山神社は様々なイベントの運営を行っており、イベント時には多くの来訪者がみられる。神社の豆まきなどでは氏子町外からの年男を募り、著名人を招聘するなどの取り組みがみられる。また初詣や年越祭の際には、TXや関東鉄道に広告

を掲示するなど広報活動も盛んに行っている。そのほかつくば観光コンベンション協会主催のイベントには協力という形で参加し、梅まつりに梅の枝の提供を行っている。神社としては、こうしたイベントが筑波山神社への信仰の契機になってほしいという願いがある。

Ⅲ－２ 行政による観光誘致の取り組み

１）つくば市観光基本計画の策定

つくば市が策定している観光基本計画において、基本方針と主な取り組みとしては、大きく以下の四つに分けられる（第３表）。

一つ目は、「おもてなし」を大切にした観光環境づくりである。観光都市として発展を遂げるためには観光業を営むための基盤が必要であり、社

会インフラや観光施設などの整備が不可欠である。また、観光業に携わる人材を確保し育成することも重視している。

二つ目は、自然・科学・歴史をいかした観光プログラムづくりである。つくば市内は有数の研究機関が点在する研究学園都市であり、また、ブルーベリーをはじめとした農業も盛んに行われている。これらの豊富な観光資源を活用した取り組みを行っている。

三つ目は、インバウンドに対応した観光体制づくりである。訪日外国人の増加は近年注目されており、グローバルMICEの誘致や外国人を対象としたイベントを開催するなど、つくば市に訪れる外国人を増加するための取り組みが行われている。

四つ目は、筑波山地域ジオパークの活用と広域

第３表 つくば市観光基本計画の枠組み

基本方針および主な取組	
1. 「おもてなし」を大切にした観光環境づくり	
Ⅰ	人材の育成
Ⅱ	観光拠点等の整備
Ⅲ	食と特産品の開発・推進
Ⅳ	社会インフラとの連携
2. 自然・科学・歴史をいかした観光プログラムづくり	
Ⅰ	自然環境をいかした観光プログラムの推進
Ⅱ	科学をいかした観光プログラムの推進
Ⅲ	スポーツツーリズムの推進
Ⅳ	誘客・観光PRの促進
3. インバウンドに対応した観光体制づくり	
Ⅰ	訪日外国人旅行者への「おもてなし」体制づくり
Ⅱ	グローバルMICE誘致の推進とアフターコンベンションの促進
Ⅲ	訪日外国人旅行者の誘客促進
4. 筑波山地域ジオパークの活用と広域観光の推進	
Ⅰ	筑波山地域ジオパークの活用
Ⅱ	近隣地域との広域連携の推進

（「第２次つくば市観光基本計画」より作成）

観光の推進である。筑波山地域がジオパークに登録されたことで、新たな観光資源としての役割が期待される。このジオパークはつくば市だけでなく、周辺の市域とも重複するため、近隣地域との連携が求められている。

2) 観光インフラ整備

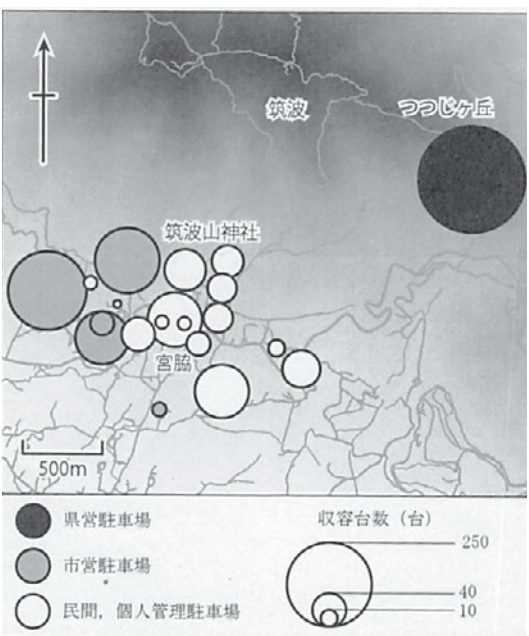
つくば市および旧筑波町が設立し、所有する観光インフラを第4表に示す。

(1) 観光案内所

筑波山における観光案内所として機能する施設は、1987年設立の筑波山観光センターと2014年設立の筑波山おもてなし館の二つ存在する。筑波山観光センターは、現在は筑波山観光案内所として筑波山神社につながる神社入口交差点付近に位置しており、各種パンフレットを用意し筑波山地域の観光拠点となっている。また、筑波山おもてなし館は市営であり、公営施設の中では比較的新しく設置されたものである。市営第1駐車場敷地内に位置し、観光案内所のほか飲食店も営業しており、観光者の休憩所として機能している。

(2) 駐車場

観光者向けに整備された駐車場の場所と収容台数を管理者ごとに分類し、第12図に示す。市営駐車場は筑波山周辺では4か所整備されていて、それぞれの駐車場の開業年が第4表にまとめられている。また、つくば市は市営第1～第4駐車場の他に、筑波山と筑波山麓地域の観光振興を目的とした筑波山麓駐車場も5か所整備しており、第12図中では2か所（筑波山麓筑波駐車場、筑波山麓神郡駐車場）が含まれている。市営第1～第4駐車場は、整備当時は無料の駐車場もあったが、現在は各駐車場にゲートが設置され、500円の駐車料金の支払いが必要である。また、筑波山神社周辺の販売店・飲食店を中心に民間・個人が管理している駐車場もみられる。これらの駐車場は、混雑期は駐車料金500円で、敷地内の駐車場を観光者向けに開放する店舗もみられる。市営駐車場は特に収容台数が多く、第2駐車場を除く3か所の駐車場では収容台数が100台以上で、多くの観



第12図 筑波山における管理者別駐車場収容台数とその分布（2017年）

（聞き取り調査より作成）

第4表 市営観光関連施設の開業年

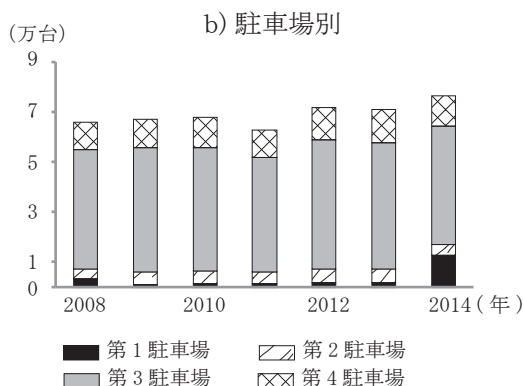
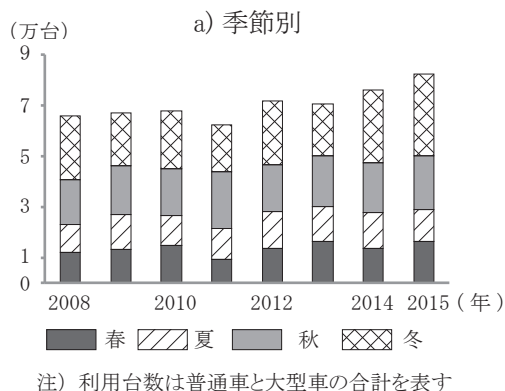
年	開業施設
1963	市営第1駐車場
1968	市営第2駐車場
1968	市営第3駐車場
1979	市営第4駐車場
1987	筑波山観光センター
2014	筑波山おもてなし館
2015	公衆トイレ

（つくば市観光基本計画より作成）

光者の受け入れに対応しているが、繁忙期には各駐車場も満車で、交通渋滞が発生する。近年の利用台数推移を第13図に示す。

(3) トイレの設置

また、観光関連施設として公衆トイレの整備も重要である。第4表に示すように、つくば市は2015年に公衆トイレを市営第1駐車場前に整備した（写真4）また、市営第2駐車場に隣接した公衆トイレも整備されている。



第13図 市営筑波山駐車場の利用台数推移
(2008年～2015年)
(つくば市観光物産課提供資料より作成)

3) 新たな観光資源の創出

(1) 筑波山麓フットパス

第14図は、つくば市が提供している筑波山麓フットパスマップをもとに作成した筑波山麓フットパスの分布である。このコースはつくば市が推奨しているコースであり、筑波山へ向かうルートは他にも多数存在する。筑波山麓地域をより楽しんでもらうために、上りルートと下りルートでコースがやや異なっている。筑波山麓バス停をスタート地点とし、りんりんロードや西山通りを経由する上りルートと、つくば道を経由する下りルートが提供されている。また、それぞれのルート付近に位置する観光者向けのみどころをつくば市がフットパスマップとともに紹介している。

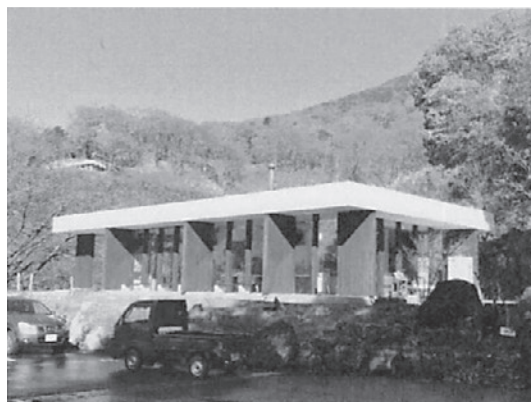
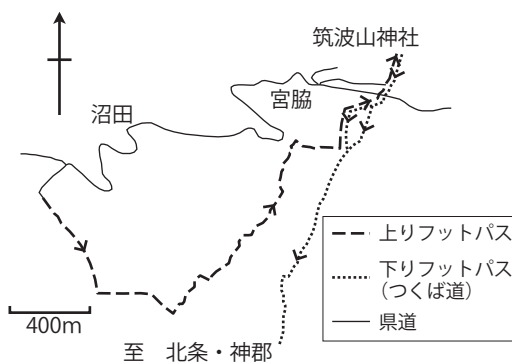


写真4 筑波山おもてなし館

2014年に開業した市営施設であり、筑波山および筑波山地域ジオパークにおけるビジターセンターの役割を担う。背後に筑波山梅林が隣接し、2～3月は観梅者で賑わうほか、手前には山麓斜面の地形や樹木を活用した自然共生型アウトドアパークであるフォレストアドベンチャー・つくばが立地し、おもてなし館にその受付・案内が置かれている。

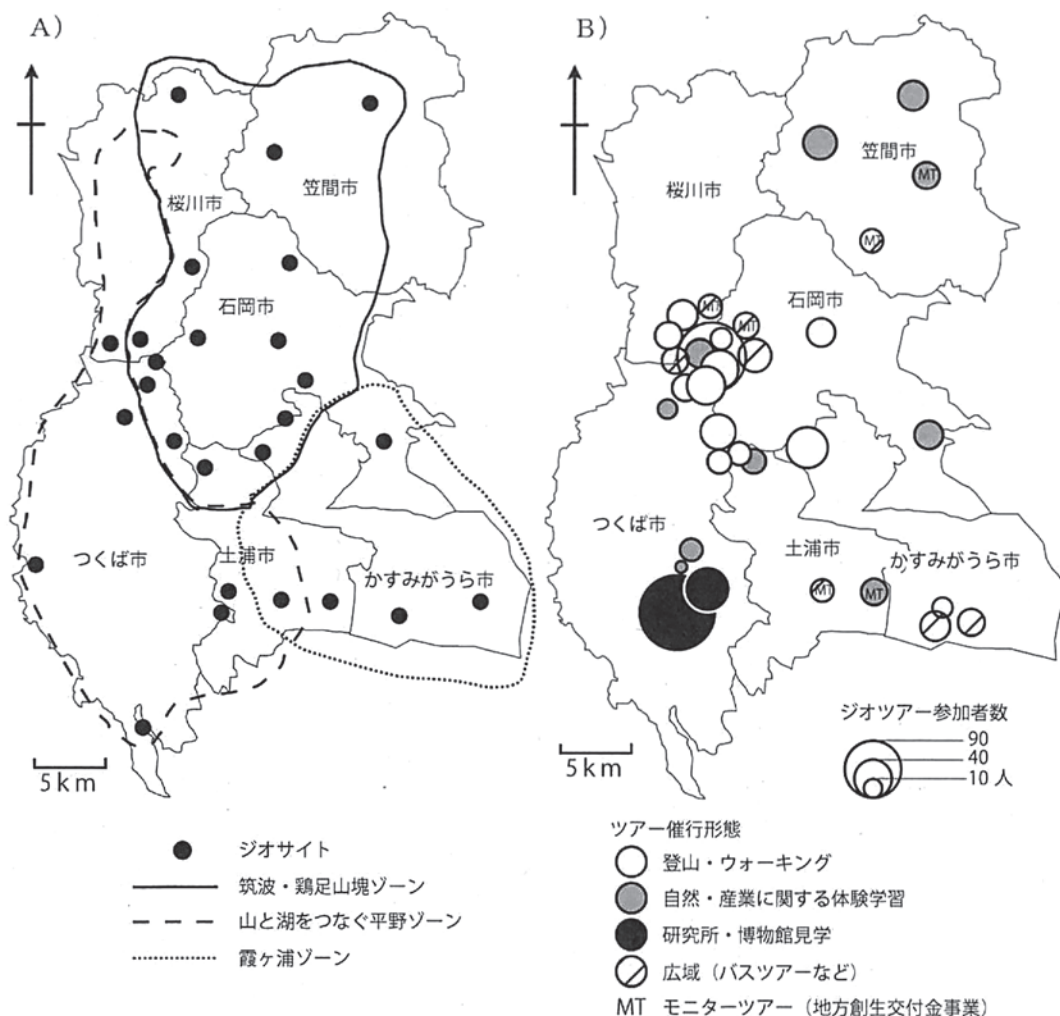
(2017年12月 猪股撮影)



第14図 筑波山麓フットパスの分布 (2017年)
(つくば市HPより作成)

(2) 筑波山地域ジオパーク

第15図は、筑波山地域のジオパークにおけるジオサイトの分布である。ジオサイトとは、地形・地質面において貴重とされるスポットを指す。筑波山地域のジオパークは、地形の成り立ちや地質の歴史など地域の特徴から大きく三つのゾーンがあり、「山と湖をつなぐ平野ゾーン」、「霞ヶ浦ゾーン」、「筑波・鶏足山塊ゾーン」に分けられる。「山と湖をつなぐ平野ゾーン」では、主に関東平野の



第15図 筑波山地域ジオパークにおけるジオサイトの分布と筑波山地域ジオパーク推進協議会によるジオツアーの催行形態および参加人数とその分布

A) ジオサイトの分布と3つのゾーン, B) 2016年度のジオツアーの催行形態および参加人数とその分布

(つくば市ジオパーク室提供資料より作成)

成り立ちについて学ぶことが出来る。蛇行河川が作りだす地形・地質や、里山の生態系、水害の歴史など河川を軸に学べるジオサイトが5か所紹介されている（一部他ゾーンとの重複あり、以下同様）。「霞ヶ浦ゾーン」では、数十万年前以降の気候変化に伴う海面変動によってつくられた地形や地質が、霞ヶ浦周辺の7か所のジオサイトにおいて学ぶことが出来る。そして筑波山を含む「筑

波・鶏足山塊ゾーン」では最も多い15か所のジオサイトが紹介されており、筑波山周辺の山地におけるマグマの形成や海洋プレートの移動を、岩石や地質の特徴から学ぶことが出来る。

また、第15図にはつくば市ジオパーク推進室が催行しているジオツアーを、2016年の参加者数および催行形態に分けて示している。ジオパークの核である筑波山を中心としたジオツアーが多く催

行されていることが分かる。筑波山を含む山々が連なる地域では、登山やウォーキングを行うジオツアーが多く、自然・産業に関する体験学習はその周辺の市町村を中心に催行されている。また、つくば市に立地する研究機関もジオツアーに関連した分野では見学行事を催行している。

より広域から観光者を集客するために、都内を発着するバスツアーで催行されているものもある。この場合、複数のジオサイトを巡るツアーが多く、多くのジオサイトを訪れることが出来る。また、第15図上でMTと表記しているモニターツアーと呼ばれる形態があるが、これは地方創生交付金事業で、交付金によって催行されているジオツアーである。

Ⅲ-3 つくば観光コンベンション協会による観光誘致の取り組み

1) つくば観光コンベンション協会の概要

現在つくば市には、一般社団法人つくば観光コンベンション協会があり、つくば市所管の観光関連施設の指定管理者事業や観光関連イベントの主催・後援を行っている。

この法人の目的は、「市内外からの観光客の誘致及びコンベンションの誘致、支援を行うことにより、つくば市における観光及びコンベンションの振興を図り、もって地域経済の活性化及び文化の向上に寄与すること」である。現在のところ組織は、総務委員会、観光宣伝委員会、環境委員会、コンベンション委員会と四つの委員会により構成されており、観光客の誘致および受け入れ態勢の整備からコンベンションの誘致開催支援、地元農産物等観光土産品の紹介宣伝及び販売など、様々な事業を行っている。これらの事業は茨城県内において行うものと定款で定められており、県外での事業活動は行っていない。法人の構成員は、法人の事業に賛同して入会する個人または団体である。平成29年度時点では宿泊や飲食、各種サービスをはじめ、さまざまな業種の235の正会員と31の賛助会員で構成されており、官民連携での観光事業の橋渡し役を担っている。

2) 観光関連のイベントの開催

前述した協会の目的において、観光事業では協会が主催・後援するイベントも多く、豊かな自然環境の「筑波山」と最先端の技術を集積した「筑波研究学園都市」を柱とした既存の観光資源を活用するとともに、新たな観光素材の検証を図りながらつくばへの観光誘致を行っている。

筑波山周辺では、例年15万人以上の観光客が訪れる筑波山梅まつりをはじめとして、さまざまな行事が開催されている（第5表）。近年では2016年1月1日施行の改正祝日法にて新設された8月11日の祝日「山の日」に見合うイベントとして、従来からあった「がまレース」というランニングイベントを山の日に開催される筑波山がままつり（写真5）と同日開催に変更し、御幸ヶ原では流しそうめん大会等を行う「山の日イベント」を実施するなど、筑波山の自然を活かしたイメージアップ・地域活性化による新たな誘客促進を図っている。また、研究学園都市エリアに位置するTXつくば駅周辺においては、毎年8月末に「まつりつくば」と称する夏祭りも盛大に開催されており、毎年40万人以上の集客が見込まれている。さらには様々な種類のハイキングイベントを通年的に開催し、継続的に参加者を集めている（第6表）。

3) 観光ボランティアガイド298

観光誘致事業においては、協会がつくばの魅力を案内する「つくば観光ボランティア298」と称する観光ボランティアガイドの育成及び活動促進も行い、観光客の受け入れ態勢の充実を図っている。

現在ガイドのメンバーは平成29年現在38名で、主な業務内容はイベントにおいての観光宣伝、筑波山及び山麓地域・市内でのガイド、市内外で開催されるボランティア大会への参加などである。

筑波山神社境内（毎月土日）及び筑波山梅林（2月から3月）に常駐し、おもてなしの強化を図っている。ガイド領域も境内常駐による筑波山神社や筑波山梅林といったスポットのガイド活動だけ

第5表 つくば観光コンベンション協会が主催・後援するイベント（2016年）

事業内容	開催月日	開催場所	内容
つくば書初め展	2月3日～9日	筑波銀行つくば副都心支店展示	市内小学校36校から214点展示
筑波山梅まつり	2月25日～3月20日	筑波山梅林	筑波山ガマの油売り口上(毎日)、つくば観光ボランティア298園内ガイド(土日)他
筑波山頂カタクリの花まつり	4月1日～20日	筑波山頂 カタクリの里・自然研究路 他	カタクリの花散策ハイキング、筑波山ガマの油売り口上
つくばフェスティバル2016	6月4日～5日	大清水公園	セグウェイ体験試乗会
筑波山頂七夕まつり	7月15日～18日	筑波山御幸ヶ原	流しそうめん大会
山の日イベント	8月11日	筑波山御幸ヶ原	流しそうめん大会、他
筑波山ガマまつり	8月11日	筑波山門前通り周辺	郷土芸能(ガマの油売り口上、よさこいソーラン実演等)、 がまレース2016、筑波山屋台村
まつりつくば2016	8月27日～28日	つくばセンター広場	ステージ運営、ブース出展(福来ラーメン販売PR販売等)
くきざき夢まつり	11月20日	荃崎運動公園	セグウェイ体験試乗会
筑波山もみじまつり	11月1日～30日	筑波山各地	筑波山ガマの油売り口上、ハイキングイベント、他

(つくば観光コンベンション協会提供資料より作成)



写真5 筑波山ガマまつりの様子

2017年は、8月11日（山の日）に合わせて開催された。宮脇地区の参道は全面的な交通規制が行われ、年齢別・男女別に日程が組まれた「がまレース」が行われる。

(2017年8月 猪股撮影)

でなく、平沢官衙遺跡、小田城跡などの歴史的文化遺産などでも活動は行われている。

Ⅲ－4 鉄道・索道企業による観光誘致

1) 首都圏新都市鉄道株式会社（つくばエクスプレス）

2005年に秋葉原－つくば間に開通したTXは筑波山観光において欠かせない交通手段である。2005年の開業当時のTXの駅ホーム内では広告看板の入り手がほとんどおらず、その状況をうけた首都圏新都市鉄道株式会社が筑波山についての宣伝看板を作り設置した。さらに様々な企画を打ち出し、筑波山観光を盛り上げようとしている。その一つの例が、TX、バス、ケーブルカー、ロープウェイの乗車券がセットになった「筑波山きっぷ」である。このきっぷを提示することで、協賛

第6表 ハイキングイベント開催日時と参加者人数（2016年度）

事業内容	開催日	参加人数(人)
・縁結び(婚活)ハイキング	6月14日(日)	63
	9月6日(日)	66
	9月23日(祝)	61
	12月6日(日)	65
・縁結び(婚活)登山	5月31日(日)	49
	9月13日(日)	48
	12月13日(日)	49
	3月13日(日)	45
・筑波山パワースポット巡り	5月23日(土)	40
	9月19日(土)	27
	3月5日(土)	71
	3月19日(土)	82
・四季の道ハイキング	8月29日(土)	46
	11月13日(金)	78
・紅葉の筑波山ハイキング	11月17日(火)	54

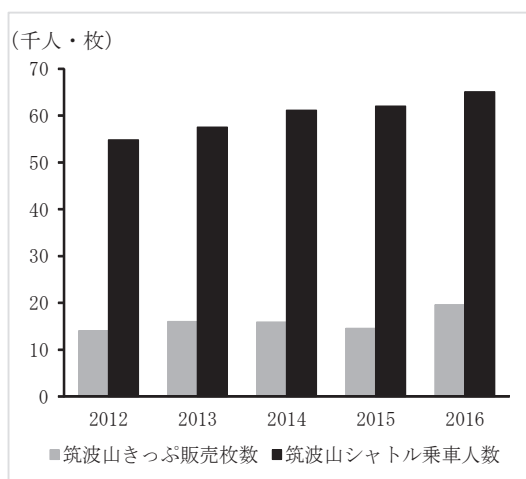
（つくば観光コンベンション協会提供資料より作成）

施設では様々な特典を受けることができる。筑波山きっぷの年間販売枚数は毎年1万枚を超えている（第16図）。

また、ロープウェイ・ケーブルカーを使わず歩く人向けには「筑波山あるキップ」というものがある。江戸時代の筑波山神社への参道であったつくば道を巡るスタンプラリーを行っており、この際には前述の「筑波山きっぷ」や「筑波山あるキップ」が特定の場合において利幅が大きくなる。他にも「筑波山MAP」というパンフレットを作り、筑波山の歴史や見所や名物、グルメといったものを分かりやすく紹介している。

2) 関東鉄道株式会社

関東鉄道株式会社はつくば駅より「直行筑波山シャトルバス」（以下、筑波山シャトル）を運行している。自家用車を用いない場合にはつくばエクスプレスを利用してつくば駅まで来て、そこか



第16図 TX筑波山きっぷ及び関東鉄道バス筑波山シャトルの利用者数推移（2012年～2016年）

注）筑波山シャトルの乗車人数はつくばセンターからの乗車のみをカウントした数値である。

（つくば市観光基本計画より作成）

ら「筑波山シャトル」もしくはつくば市が運行する「つくバス（北部シャトル）」に乗り換え向かうのが一般的な方法である。その中での「筑波山シャトル」の果たす役割は大きく、ここ数年の利用客は毎年5万人を超え、さらに増加傾向にある（第16図）。また、後述する「筑波山ロープウェイスターダストクルージング」では臨時便を運行しており、筑波山の観光イベントにはなくてはならない存在となっている。

3) 筑波観光鉄道株式会社

筑波観光鉄道株式会社は、筑波山ケーブルカー・ロープウェイ、食堂、売店などの運営およびケーブルカー・ロープウェイを利用したイベントを行っている。毎年9月～翌年2月の土日祝日には「筑波山ロープウェイスターダストクルージング」が行われ、(写真6)。この時期のみの夜間営業を実施している⁶⁾。同様のイベントとしては「筑波山ケーブルカー もみじライトアップ×夜間運行」が挙げられる。他にも、1月1日には初日の出早朝運行をしており、ケーブルカーの始発



写真6 スターダストクルージング期間中の筑波山ロープウェイ女体山駅の様子

2016年シーズンは、2016年9月17日（土）～2017年2月26日（日）の土日祝日、および2016年12月26日～30日の平日に、21時までに夜間運航がされた。女体山駅では「光のファンタジー」と題したイルミネーションも行われた。

（2016年12月 猪股撮影）

は早朝4時30分、ロープウェイの始発は早朝5時となっている。近年の利用者数の推移を第17図に示す。特に月別推移をみると、イベントが行われる月で利用者数が大きく増加していることが分かる。

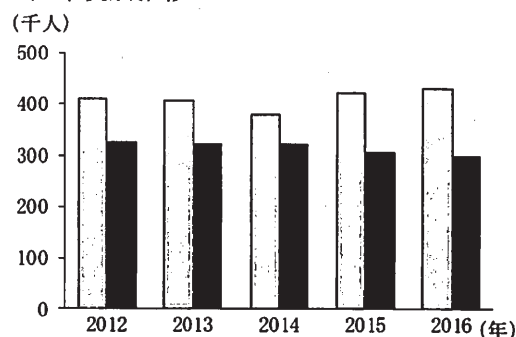
Ⅳ 筑波山における観光客受け入れ基盤とその変容 ー 門前町を中心にー

Ⅳ－1 観光受け入れ施設立地とその変化

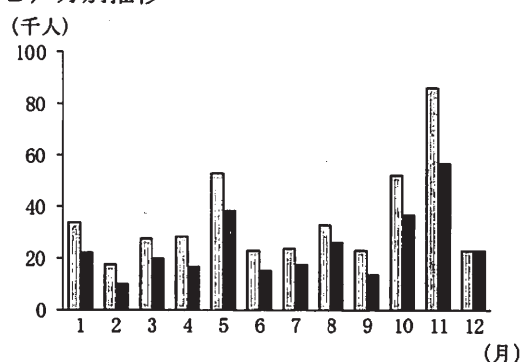
第18図に、筑波山門前町における明治初年から現在までの施設立地変化を示す。明治初年においては、宿泊施設21軒、土産物店32軒が存在し、筑波山神社を中心として、南方向と西方向の道路に沿って分布していた。

昭和中期においては、明治初年に比べて宿泊施設は大幅に減少し6軒が残るのみとなった。宿泊施設の多くは、土産物店へ転業するかたちをとっていた。土産物店はそれゆえ増加し、50軒に至った。筑波鉄道の開業にともない大正期に観光ルートから外れた東山地区では、観光施設の多くが廃業し、六丁地区では斜面上方に新しくできた自動

A) 年度別推移



B) 月別推移



□ ケーブルカー利用者数 ■ ロープウェイ利用者数

第17図 筑波山ケーブルカーおよび筑波山ロープウェイ利用者の推移

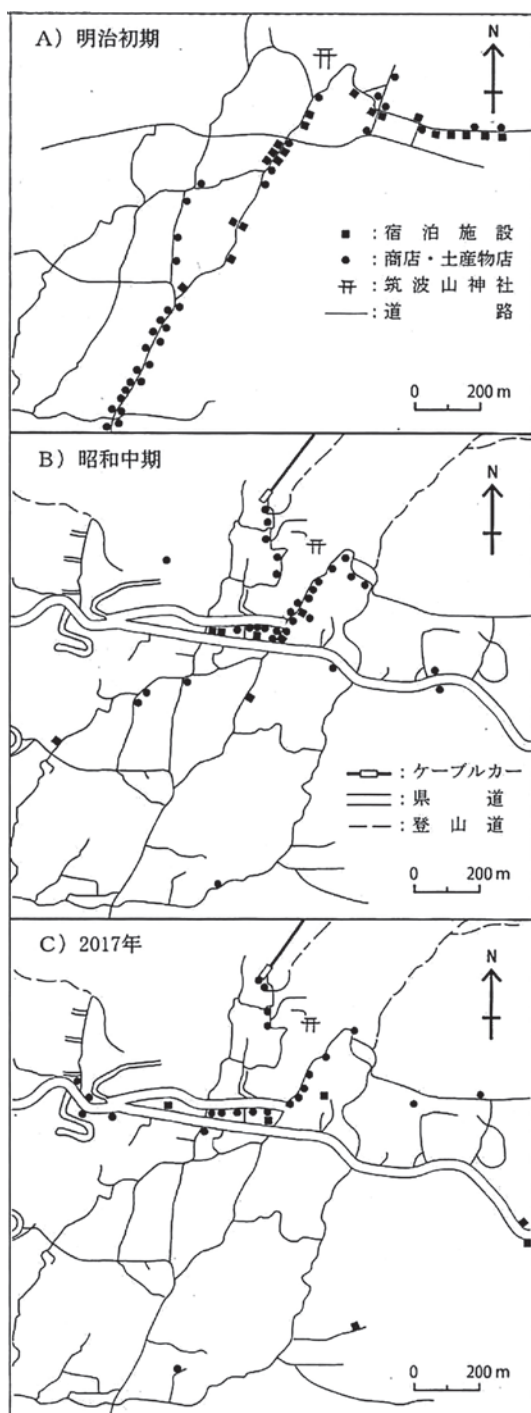
A：2012年～2016年の年度別推移

B：2016年1月～12月の月別推移

（ヤマケイ登山総合研究所（2017）より作成）

車道路に沿った場所への移動があった。その結果、昭和中期の宿泊施設と土産物店は自動車道両側に拡散し、特に筑波山神社南西部に集中した。

現在においては、筑波山登山道に沿って立地していた「弁慶茶屋」は廃業するとともに、宮脇地区の西側において新規に店舗開業がみられた。一方で、昭和中期に比べて宿泊施設がさらに減少した。その中で、「江戸屋」と「青木屋」など明治時代から営業していた施設が残存している。宿泊施設は神社南西側の自動車道に沿って分布するほか、門前町の南端部にも新規開業がみられた。現在における門前町の核心部となっている宮脇地区の土地利用は第19図に示した。近年では空き家・空き店舗化が進行している。



第18図 筑波山門前町における宿泊施設および土産物店の分布とその変化

(西海 (2012) および現地調査より作成)

Ⅳ-2 宿泊施設の経営形態

対象地域には6軒の宿泊施設が存在し、このうち5軒への聞き取り調査を実施した。日帰り旅行化が進展するなかで、経営規模を反映して、観光客受け入れの特性に差異が見られた (第7表)。

1) 団体観光客受入型 (大規模)

大規模の宿泊施設は、筑波山観光黎明期にすでに存在していた (番号1, 番号2)。団体研修の受け入れ、都市部からの勉強合宿や団体旅行の受け入れにより、経営を存続させている。筑波山を観光目的地としないような観光客の受け入れが卓越するケースもみられる。

宿泊施設番号1は1628年に開業した。館内は宴会場、会議室、足湯、レストランなど様々な施設を提供している。宿泊プランについてグループ向けと個人向けなど各種用意している。

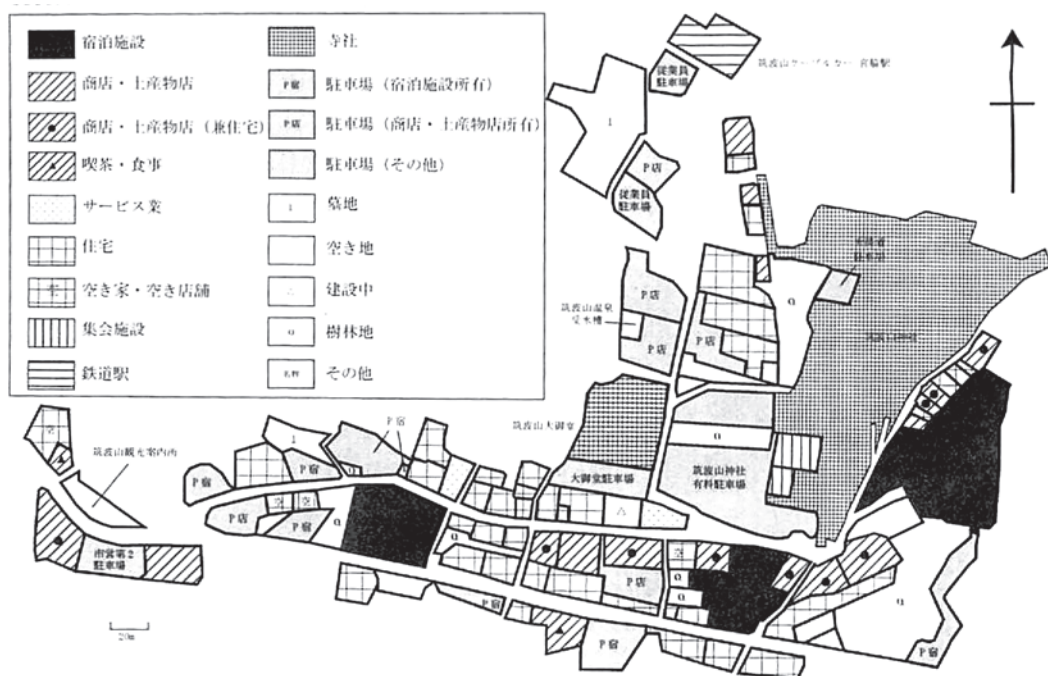
TXが開通した2005年ごろが一番賑わっていた、訪れる客数は年々増加傾向にあるという。2016年間宿泊客数は1万8千人を超えた。団体客は、近場の企業の忘年会、東京・埼玉方面からの企業の会議、筑波大学関係の学会後の宴会団体である。個人客としては、登山客 (若年層、山ガール) が多い。

宿泊者の予約手段は、直接予約する場合が多く、他に楽天トラベルやじゃらんのようオンライン旅行会社の利用や総合旅行会社 (JTB, 近畿日本ツーリストなど) を介した予約方法もとられる (第20図)・宿泊施設1の集客圏は、第21図をみると、団体の利用が茨城県をはじめ、主に東京圏 (東京、千葉、埼玉、神奈川) が多い。中国、韓国、アメリカなど海外からの観光客もある。

2) 個人観光客受入型 (中小規模)

中小規模の宿泊施設は、筑波山を観光目的地とするような個人観光客、とりわけ登山者の宿泊を意識したサービス提供や誘客戦略より、宿泊者数を維持し、経営を存続させている。

宿泊施設番号5は1981年より民宿として開業した。1985年の万博開催時に、宿泊施設が不足して



第19図 筑波山門前町における土地利用形態（2017年）

いるという理由から、万博開催前年の1984年にまとまった補助金が得られたため、現在のホテルを建設した。2017年5月に、屋上露天風呂を新たに設置した。

1980年代後半（万博終了後バブル崩壊）までと、TX開業直後（2005～2006）は、人通りが増えた。現在は筑波山に登ることを目的とした客が多いが、温泉や宿泊などに利用する客もいる。誘客戦略として、宿泊しない客にも駐車場を提供している（その際駐車料金は徴収していない）。

現在は年間で約8,000人が利用する。団体での利用はほとんどない。たまに幼稚園などの合宿が入る（年に数件）が、大型バスが来るようなことはない。利用客のほとんどは関東圏で、茨城が50%、千葉が20%、埼玉が20%、その他関東が10%といった内訳である（第22図）。

Ⅳ-3 商店・土産物店の経営特性

筑波山門前町宮脇地区の商店・土産物店は、20軒に及んだ。一方、ケーブルカー「筑波山頂駅」

周辺の御幸ヶ原地区の商店・土産物店は10軒であった。

これらの商店・土産物店の経営形態を明らかにするため、質問紙を用いた直接対面方式での聞き取り調査を行った。その結果、宮脇地区17軒、御幸ヶ原地区2軒から回答を得ることができた。調査結果と御幸ヶ原地区の商店ホームページに記載されている情報をまとめ、記したものが第8表である。

本節では、調査結果をもとに現在の商店・土産物店の特徴を述べる。

1) 商店・土産物店の経営形態

(1) 宮脇地区の商店・土産物店の特徴

商店・土産物店の開業年は、戦前（店舗番号1, 6, 14, 15, 16）、1945年～1975年（店舗番号2, 4, 7, 8, 10, 11, 12）、2000年代（店舗番号3, 9, 13）の3時期に区分することができた。

共通点として、多くの店が季節や天気に合わせて、営業日や営業時間を決めていた。

第7表 筑波山における宿泊施設の経営形態

宿泊施設番号	基本情報			増改築			駐車場収容台数	土地所有形態	従業員数(人)	継承状況		
	開業年	客室数(収容人数)	温泉	実地年	内容	理由				代	先代	世襲関係
1	1628	40(228)	A	-	-	-	30(5)	●	40(20)	-	父	娘
2	1877	40(235)	A	1935	増築客室2室	-	70	-	50(40)	2	-	-
3	-	58(350)	A	-	-	-	100(10)	-	-	-	-	-
4	1967	42(200)	B	1983	建替	万博に合わせて	100(10)	○	20(10)	3	父	息子
5	1984	21(80~96)	A	なし	-	-	10	○	-	2	父	息子
(6)	1996	(160~170)	A	-	露店バルコニー	受入客増大のため	50	◎※1	6(2)	初	父	娘

注)「-」は不明を指す

「温泉」: A…筑波山温泉(共同) B…筑波温泉

「駐車場収容台数」: 上段…普通車, 下段カッコ内…大型バス

「土地所有形態」: ●…自己所有 ○…会社所有 ◎…借地

「経営方針」: A…現状維持, B…規模拡大, C…規模縮小

「従業員数」: 上段…従業員数, 下段カッコ内…正社員数

「SNS利用」: プ…ブログ, FB…facebook

これらの店舗の取り扱い品は、土産物と飲食物である。土産物は筑波山の文字や関連絵図が記載されている箱菓子、ガマに関連した商品が代表的である。飲食物は、店内で作られるうどんやそばやソフトクリームが共通して販売される。その一方でオリジナル商品を開発し、目玉商品として販売する店舗も存在した。また、店舗敷地内に駐車場を保有する商店・土産物店の一部は、観光者への駐車場貸し出しで収益を得ていた。

経営者年齢は、17店舗中12店舗が60歳以上であり、高齢化が著しい。また、後継者がいないもしくは未定である店舗も半数以上の9店舗存在した。

(2) 御幸ヶ原地区の商店・土産物店の特徴

御幸ヶ原地区の筑波山頂売店⁷⁾は戦前に営業した。ケーブルカーの運行時間に合わせて営業しており、主に土産物と飲食物を販売する。経営者年齢は宮脇地区と同様高齢化しており、後継状況は各店舗により異なる。なかには70代女性1人で経

営する店も存在した(店舗番号18)。また、経営者らは東山地区や筑波地区といった筑波山周辺に居住していた。

1969年に筑波山が水郷筑波国定公園に指定されるに伴い、山頂商店5件は改修工事等を行っていた。国定公園に指定されると、建て替えや改築が不可能となるためである。この際、経営面積の削減を求められるなど、やむを得ず経営規模の縮小に取り組まなければならない店舗も存在した。

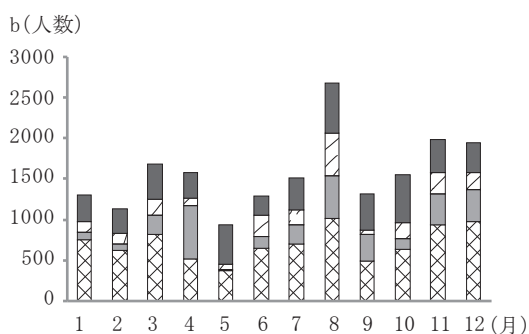
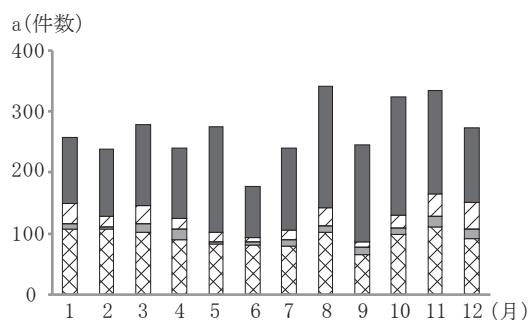
2) 観光者受け入れの特徴

聞き取り調査から得られた現在と1960年代の観光者の行動パターンをもとに、商店・土産物店の現在の観光者受け入れ特徴を明らかにする。第9表は筑波山を訪れる観光者の代表的な行動パターンを示したものである。

1960年代は登山道路や観光道路の開通に伴い、筑波山を来訪する観光者の交通手段が自動車へと移り変わる。そこから、筑波山は休日や長期休暇時に家族で一日かけて観光する空間としての性格

後継者 (続柄)	経営 方針	売上		来訪者			広告形態	
		最繁忙年	背景	年間宿泊客数 (人)	主たる利用目的①	主たる利用目的②	TX筑波山切符 加盟状況	SNS 開設状況
未定	B	2005年	TX開業に伴う東京からの客	約20000	会社の研修や 懇親会	登山 (日帰り)	加盟	ブ, FB
未定	A	1955～ 1975年	団体ツアーの隆盛	-	学生の合宿・ 会社の研修や 懇親会	-	非加盟	無
-	-	不明	-	-	-	-	加盟	無
無	A	-	-	約10000	登山	学生の合宿 会社の研修・ 懇親会	非加盟	FB
未定	B	1980年代 後半 2006年	バブル景気, TX開業	約8000	登山	-	加盟	FB
未定	A	-	-	約30000 (温泉利用客数)	登山	-	加盟	FB

(聞き取り調査より作成)



直手配 一般業者
 総合旅行会社 (JTB、近畿日本ツーリスト、東武トップツアーズ、農協観光、日本旅行、名鉄観光、日通旅行)
 オンライン旅行会社 (E-Hotel、じゃらんnet、楽天トラベル、予約番、e宿、Yahooトラベル)

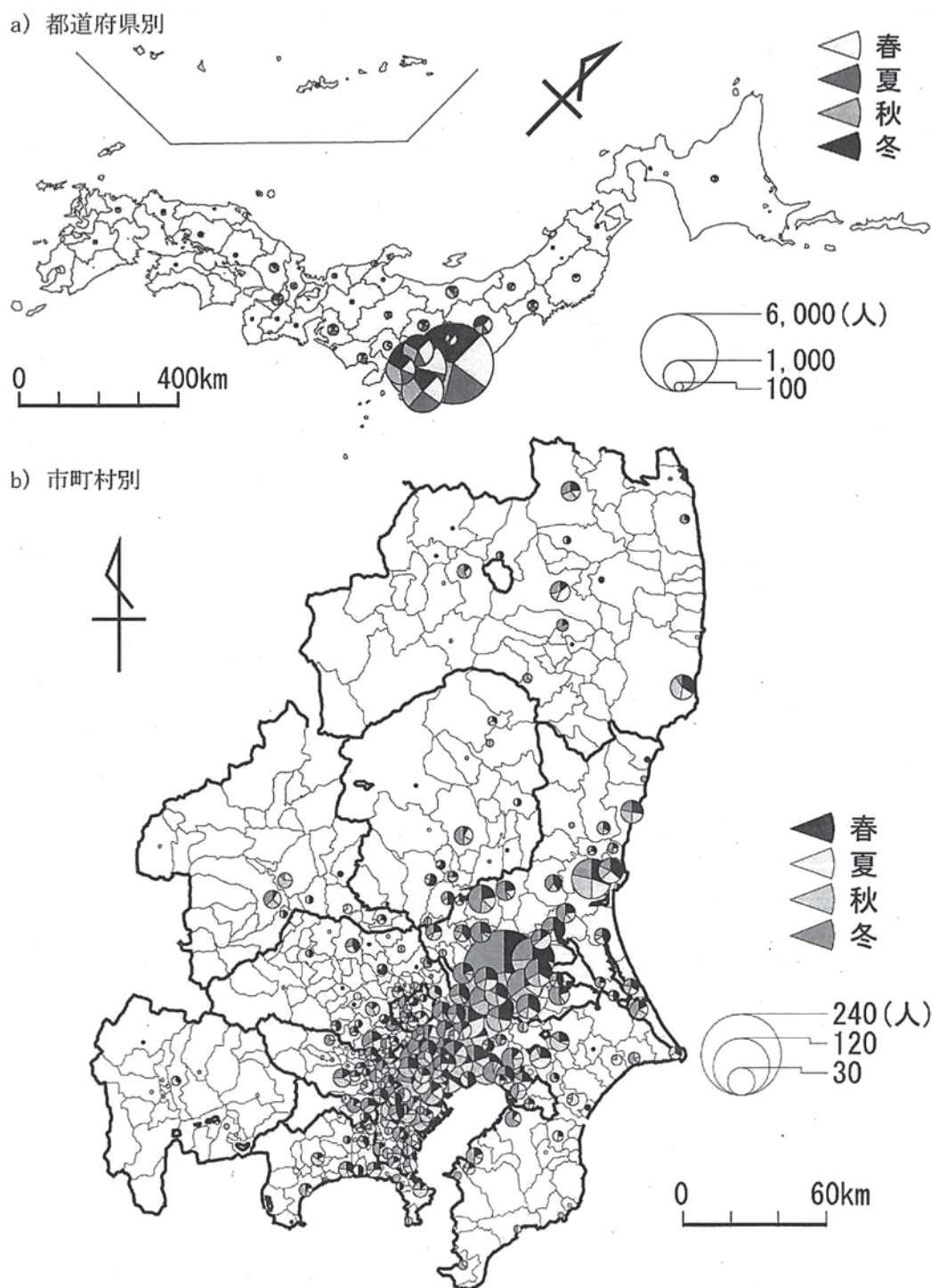
第20図 宿泊施設1における団体受入数の月別推移 (2016年)

(宿泊施設1 提供資料より作成)

を強める。筑波山地区来訪後は、ケーブルカーに乗り山頂へ行き、商店・土産物店で昼食や土産物を購入し、その後、宮脇へ戻り再度土産物の購入を行うパターンが一般的であった。また、団体ツアーを利用して来訪する観光者も多かったため、商店・土産物店もツアー会社と提携をし、受け入れを積極的に行った。

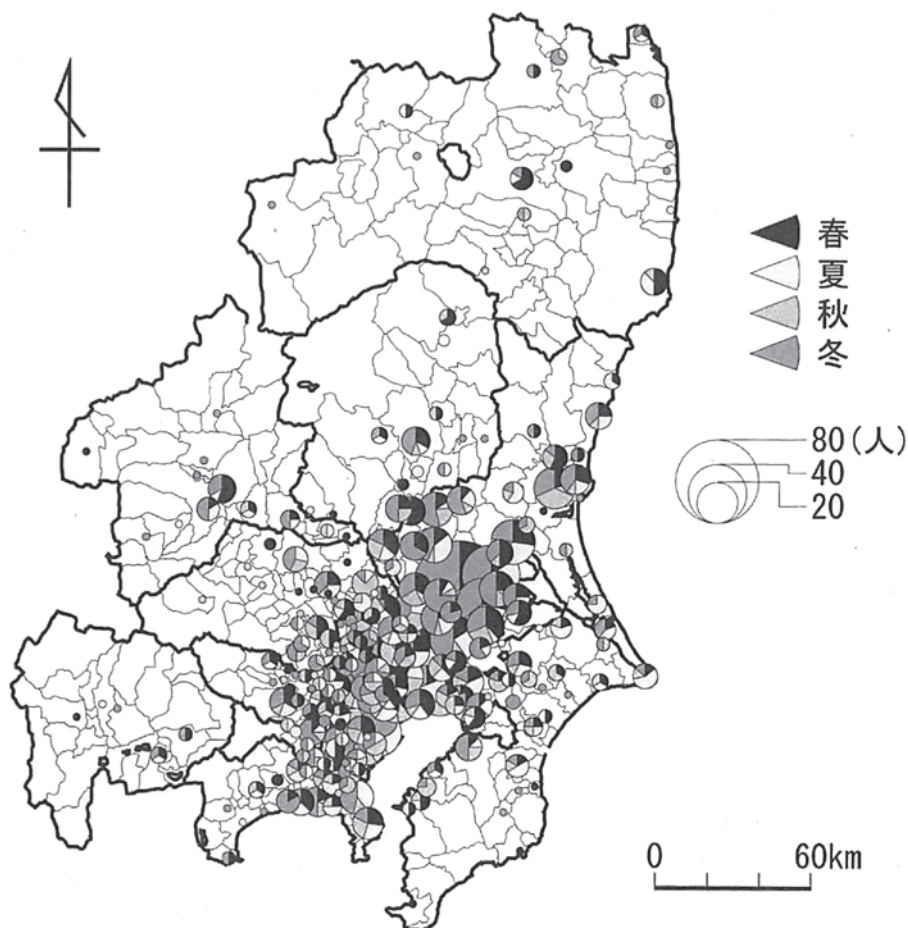
しかし、近年の登山ブームやTXの開通により、観光者の性格は大きく変化した。TXの開通は筑波山を都市圏から短時間で来訪できるより近接性の、高い山へと変化させ登山観光者の割合が増加した。その結果、20代学生の友人団体から60代以降の高齢者までの幅広い層が手軽に日帰り登山をする。彼らの目的はあくまで登山であるため、筑波山観光圏内の公共交通機関は利用せず、昼食も持参する傾向が高い。一部観光者は下山後にそのまま日帰り温泉を利用するため、商店・土産物店への立ち寄ることが少ない。それに加え、商店・土産物店の利用を組み込んだ団体ツアー客も減少傾向であるという。

以上のように現在の観光者の観光形態は1960年代から大きく変化している。しかし、商店・土産物店の観光者受け入れ姿勢に焦点を当てると、伝統的な観光受け入れ形態を現在まで継続させてい



第21図 宿泊施設1における宿泊者数分布（2016年）

（宿泊施設1 提供資料より作成）



第22図 宿泊施設5の市町村別宿泊者数分布（2016年）

（宿泊施設5提供資料より作成）

た。その一方、近年は外部から参入してきた商店・土産物店が登場し、筑波山地域において新たなサービスを提供している様子もみられた。

3) 商店・土産物店の事例

(1) 宮脇地区：後継者無

店舗番号8は、1975年に飲食店として開業した。現在、初代である70代の夫婦が経営を行う。筑波山地域の飲食店で唯一、海鮮料理を提供する。

開業経緯は親族が経営する宿泊施設の企業規模拡大であった。当時は宿泊施設への宴会料理提供や、宿泊施設で行われたイベントの2次会会場として利用されるなど、宿泊施設との業務連携も存

在した。しかし、現在の利用客は登山客や地元住民が中心である。

店舗は立地を生かし、自動車利用の客層のために1985年には駐車場を拡大している。現在では、休日のみ店舗利用者以外への駐車場提供を有料で行う。

1990年ごろが最繁忙年であり、当時は板前やアルバイトを雇用していた。TXの開業後、一時は利用客が増加したが、現在は繁忙期である正月や行楽シーズンに経営者の子供に手伝いを求める程度である。

経営方針や提供料理は開業当初のままであり、経営が困難となった時には店を閉めることも念頭

第8表 筑波山における商店・土産物店の経営形態

所在	店舗番号	基本情報				増改築実施年	経営		家族構成							
		開業年	営業時間	定休日	取扱品		土地所有形態	従業員数(パート)	10歳代以下	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	70歳代	80歳以上
宮脇	1	1935	9:00～17:00	不定休	土産物・飲食	1965	4	D	2						●○	
	2	1950年代	8:00～17:00	不定休	酒・土産物	1965/1995	107	A	2			▲				●○
	3	2004	不定	不定休	つくばね焼	無	6	A	2							●○
	4	1966	10:00～17:00	不定休	土産物・飲食	1967	0	A	3(1)						●○	
	5	-	10:00～17:00	雨天休業	雑貨品	無	0	C	1						●	
	6	1919	9:00～17:00	不定休	土産物・飲食	2011	6	B	2					●○		△
	7	1960年頃	不定	不定休	土産物・飲食	無	0	C	2				○	●		
	8	1975	11:00～19:00	不定休	飲食	1985	20	A	2			×××			●○	
	9	2015	11:00～18:00	金	飲食・土産物(他店商品含)	無	2	D	2(1)	*	*	*	*	*	*	*
	10	1945	7:30～16:30	雨天休業	土産物	無	0	C	2							●○
	11	1961	8:30～18:00	不定休	土産物・飲食	1990年代	30	A	4(3)			●				
	12	1960年頃	9:00～17:00	雨天休業	土産物	1971/1977	30	A	7(3)	▲▲		○	●		●○	
	13	2014	9:00～17:00	火	飲食・土産物(オリジナル商品)	無	2(1)	-	3(2)	*	*	*	*	*	*	*
	14	江戸末期	不定	雨天休業	土産物・筑波山焼	無	0	A	2			×			●○	
	15	1894	9:30～16:30	-	土産物・オリジナル商品	無	0	A	1			×	×		○	
	16	江戸末期	9:00～17:00	無	土産物・飲食	1950/1987/2011	20(1)	A	10(4)			×	×		●	▲
	17	-	-	月～木	地元の酒	-	6	-	2	-						
御幸ヶ原	18	戦前	10:00～16:00	不定休	土産物・飲食	1969年頃	0	C	4(2)						○	
	19	1920年頃	9:00～16:00	不定休	土産物・飲食	1969	0	C	1			▲			○	
	20	1971	9:20～16:30	無	土産物・飲食 オリジナル商品	2015	0	B	-	*	*	*	*	*	*	*

注1)「-」は不明を指す。

注2)「*」は企業であるためデータ無。

注3)「駐車場収容台数」:上段…普通車 下段カッコ内…大型バス

注4)「土地」:A…個人所有 B…会社所有 C…神社所有 D…借地

に置いている。夫婦には子供が3人いるが、全員他出しており、店を後継する意思はない。夫婦もその意思を尊重していた。

(2) 宮脇地区：後継者有

店舗番号16は、江戸時代末期に開業した。現経営者で7代目となり、宮前地区に残る数少ない歴史ある店である。かつては菓子屋であり、当時は神社への近接性ゆえに参拝客の休憩所としてよく利用されていた。その後、土産物・飲食店となりその形態は現在まで続く。

現在の利用者は首都圏からの日帰り個人客が最

も多い。その一方で団体ツアー客も一定数受け入れる。

店舗の増改築を1950年以降3度行い、現在の建物は5階建てである。4階部分で土産物販売・飲食提供を行い、5階が座敷となり団体客や会合用としている。

最繁忙年は1984年であり、経営者は「つくば」の知名度が全国的に向上したことが要因であると考えている。現在でも店の最繁忙期である5月の連休時には従業員を10人体制で対応している。

オリジナル商品を50年以上前から作成し、現在

第8表 (続き)

店舗 番号	継承状況					売上		広告形態		地域コミュニティ		
	先代	世襲関係	代目	後継者 (続柄)	経営 方針	最繁忙年	背景	TX筑波 山きつ ぶ加盟 状況	SNS ・HP 開設 状況	宮前振興 会加盟状 況	観光協会 加盟状況	華の会加 盟状況
1	妻の父	婿入り	2	無	1	1960年代	筑波スカイ ライン開通	無	無	有	有	有
2	父	息子	2	未定	1	1990年頃	バブル景気	有	無	有	有	有
3	無	無	1	未定	1	-	-	有	無	無	有	無
4	無	無	1	無	1	1966	団体バス 受け入れ開始	有	無	有	有	無
5	妻の父	婿入り	3	無	1	2006	TX開業期	無	無	無	有	無
6	妻の父	婿入り	3	無	1	1990年頃	バブル景気	有	無	有	有	無
7	母	婿入り	2	無	1	-	-	無	無	有	有	無
8	無	無	1	無	1	2006	TX開業期	有	無	有	有	-
9	無	無	1	無	2	2017	企業努力	有	F	有	有	無
10	夫の母	嫁入り	2	無	3	1950年代	団体バス 受け入れ開始	無	無	無	有	無
11	父	息子	2	有 (息子)	1	2005	TX開業期	無	H	無	無	無
12	妻の父	婿入り	2	有(娘の 夫)	1	1985	つくば万博	有	H	無	有	有
13	*	*	*	*	-	-	-	有	H	有	有	無
14	妻の父	婿入り	-	有 (息子)	2	1955～1965	筑波講、禅譲	有	T	有	有	無
15	夫の父	嫁入り	3	有 (息子)	2	1970年頃	大阪万博 (高度成長)	有	F・H	有	有	無
16	父	息子	7	有 (息子)	1	1984	つくばの知名 度が向上	有	T・H	有	有	無
17	-	-	-	-	-	-	-	無	無	無	無	無
18	父	嫁入り	3	無	1	1955～1965	団体バス受け 入れ開始	有	無		有	無
19	無	無	1	有 (息子)	1	1980年代後 半	バブル景気	有	無		有	無
20	*	*	*	*	-	-	-	有	F・H		有	無

注5)「家族構成」：×…非同居 ●…販売業従事(男性) ○…販売業従事(女性) 下線…経営者
…販売業非従事(男性) △…販売業非従事(女性)

注6)「継承状況」経営方針：1…現状維持 2…規模拡大 3…規模縮小

※ 非同居者は、週末や繁忙期に補助的労働力として店舗経営や商品生産の関与が開き取りで判明した者のみを「×」で示した。

(聞き取り調査より作成)

でも店の看板メニューである。また、若年層向けにTwitterを開設し頻繁に更新を行うほか、TX開通に伴う、都市圏からつくばへの観光者の増加を見込み、秋葉原駅において広報業務を行うなど積極的に誘致活動を行っている。また、現経営者は宮前振興会で会長を務めており、後継者である息子とともに外部アクターの取り組みと連携をしながら、筑波山地域全体の活性化に努めているという。

(3) 宮脇地区：2000年代以降開業

店舗番号9は、2015年に飲食店として開業した。

現経営者は、30代で旧筑波町外の出身者である。従業員は2人であるが、アルバイトも雇用している。開業経緯は、登山客向けの施設を筑波山の土地で作り、そのうえで茨城産の食品を発信したいと考えたためである。

開業当初は手焼きせんべい体験の事業をメインとしていたが、現在は食事提供にも力を入れている。店内では、他土産物店のオリジナル商品や茨城産の食品をも取り扱う。また、店舗貸し出しや山登りイベントなど様々なニーズに合わせたサービスを、SNSを通じて行っている。

第9表 筑波山を訪れる観光者の代表的な行動パターン

	1960s	現在
午前	自動車	バス
		筑波山山麓
	筑波山山麓	登山（徒歩）
正午	ケーブルカー	
	山頂 昼食（山頂飲食店） 御本殿参詣 売店散策	山頂 昼食（自炊/持込み） 御本殿参詣等
	ケーブルカー	
午後	宮脇散策（土産物購入）	下山（徒歩）
		日帰り温泉入浴
夕方以降	自動車	バス
		つくば駅
		TX

（聞き取り調査より作成）

利用客層は老若男女問わない個人客が多く、子ども連れや登山帰りに立ち寄る客も一定数存在する。今後も、登山客や訪問者の様々なニーズに合わせた新たな商品・サービス提供を目指している。

Ⅳ-4 地域内諸組織の活動

Ⅳ-2およびⅣ-3で記した宿泊施設及び商店・土産物店は近年、新たな取り組みとして、地域内組織を形成している。早川（2015）によると2000年代からは、筑波山地域において、地域住民や地域外の人々・組織が「まちづくり」活動を活発に展開しはじめたとされている。本節では、具体的な地域コミュニティの活動内容や役割を示す。

1) 筑波山宮前振興会

筑波山宮前振興会は、2010年にある宿泊施設の前経営者を中心に設立された任意団体である。筑

波山神社周辺の宿泊施設や土産店、土産物卸業者など関係者で構成され、平成29年度の会員数は24名である。宮前振興会規約（目的）第2条によると、この会は、地域づくり並びに地域社会への貢献を推進し、つくば市筑波山における観光事業の健全な発展及び改善を図り、地域経済の振興及び文化の向上に努め、観光の発展に寄与することを目的としている。2017年度は5月17日に「宮前振興会総会」が筑波山観光案内所で開かれた。会員をはじめ筑波山神社宮司やつくば観光コンベンション協会会長が出席をし、本総会では、前年度の事業報告並びに種子決算承認の確認や、本年度の事業計画について議論がされ、計7件の事業内容が実施されることが決定された。

現会長は、「宮前振興会は、つくば観光コンベンション協会では手の行き届かないローカルな視点での活動を行っていることに大きな特徴がある」と述べている。この具体的な地域に根差した筑波山宮前振興会主導のミクロな活動として、2017年6月1日に実施された「筑波山神社境内キリシマツツジ植栽事業（除草作業含む）」がある。この活動は、前年度にもケーブルカー宮脇駅への階段横及びつつじ亭跡地へ同様の植栽事業を行っており、環境整備およびお客様おもてなし事業として継続的に行われている。2017年度の作業には、会員の半数以上の参加がみられた。作業は、除草作業から苗の植え付け、水やりまでを1時間程度で終えた（写真7）。当日は、会員同士でコミュニケーションをとる様子も見受けられた。

また、つくば観光コンベンション協会主催の「第69回筑波山ガマまつり」へも参加・運営協力をし、外部アクターとの連携を通して、さらなる観光業の発展にも取り組んでいる。

以上のように宮前振興会では地域全体への貢献活動を通し、宮脇地区の連携強化に取り組んでいた。会発足以前まで土産物店・宿泊施設は「個人」として事業経営を行っていたため、地域全体で事業に取り組む動きは存在していなかった。しかし、現在では宮前振興会への参加を通し、各アクターが筑波山地域を形成する「一員」として、より良

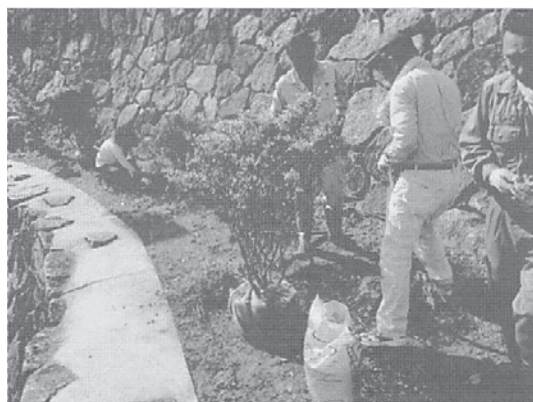


写真7 筑波山神社鏡内キリシマツツジ植栽事業の様子

宮前振興会事業の一環として、会員有志らによりツツジの植栽を行った。

(2017年6月 猪股撮影)

い地域や観光空間を築き上げることを目標としている。

2) 筑波山温泉旅館協同組合青年部

早川（2015）によると、筑波山観光地域には古くより筑波山温泉旅館協同組合と筑波山観光組合、山頂の売店組合という三つの組織が存在する。これらの団体は事業組合であり、まとまった形で「まちづくり」活動を行っていなかった。しかし、筑波山門前町の現状改善の気運が高まりを受け、2003年に組合の垣根を越え、活動を行う筑波山温泉旅館協同組合青年部（以下、青年部）が結成された。

本組織は、前述の筑波山温泉旅館協同組合の下部組織であり、40、50代の次期経営者世代が中心となり、筑波山観光空間全体に貢献する活動を行っている。

活動例として、「つくばうどん」の開発がある（写真8）。つくばの地名に沿い、筑波地鶏（つくね）、くろ野菜、下妻のローズポーク（バラ肉）とレンコン入りうどん（隣市の土浦産使用）を使用したものであり、各飲食店で販売されている。上記の地元食材の使用が共通項とされているため、各飲食店内でオリジナリティがあることも特徴であ

る。某飲食店においては、「つくばうどん」が最も売り上げを誇る商品であることが聞き取り調査により明らかとなった。

また、つくば市内の大手洋菓子店コートダジュールのオーナーシェフ中山満男氏の協賛を経て筑波山の御神木（通称つくばうむ）の開発・販売を行っている。土産物店や一部宿泊施設の売店で販売されるほか、インターネットや市内のショッピングセンターでも購入することができる。

2012年には、ゆるキャラブームに乗じ、筑波山観光地域のシンボルキャラクターである「ツッピー」をデザインした。開発当初は、Twitterを開発し、地域内の各種イベントに頻繁に登場していたという。現在はメディア露出等も減少しているが、「ガマ祭り」の広報パンフレットに描かれていたり、宮脇地区にはツッピーが描かれている電柱旗が取り付けられたりと、「ツッピー」を用いた広報活動は観光コンベンション協会の協力を経て継続されている。

このように青年部は、組織一丸となり新名物を開発し、地域全体を売り出す取り組みを実施している。



写真8 筑波山名物「つくばうどん」

「つ」つくね「く」黒野菜「ば」バラ肉を具材として使用した筑波山名物のうどん。宮前振興会会員の発案により作られた。

(2016年5月 猪股撮影)

V 筑波山における観光空間の形成と変容

V-1 観光形態の多様化と門前町の地域性格変化

II章で述べたように筑波山における観光空間の

変容を時期区分すると、次の5期に分けることができる（第10表）。各期の特徴を整理すると以下のようなになる、

第10表 筑波山における観光形態と門前町内外の変容

年代	主な観光形態	筑波山	
		門前町	門前町外部
1600 1800 1850	・筑波山信仰による参拝者の増大 ・筑波講の結成 ・一般参拝者増大 ・遊女屋通い ・参拝者減少 ・旅館「江戸屋」洋式旅館化 ・「全国大博覧会」開催（1879年）	・筑波山神社建立 ・筑波山登山道の整備拡張 ・信者による門前町的集落の形成（旅籠屋、遊女屋） ・遊女屋の廃業 ・門前町が発展・形成される 観光・参拝者向けの旅館 土産物屋等の出現	・山頂五軒茶屋営業
1900 1930	・六丁石段通りの宿場の衰退 ・ケーブル開通による日帰り登山者増加 ・「自然科学列車」による学童受け入れ	・自動車道路終点である門前町の再発展	・標高200mまで道路開通 ・筑波鉄道の開通 ・ケーブルカーの開通 ・筑波自動車商会 バス運行開始
1960 1970 1980	・モータリゼーション進展 ・水郷筑波国定公園に指定 ・梅林造成 ・梅まつりなどさまざまな行事開始	・筑波山町営駐車場完成 ・神社脇大駐車場完成	・沼田～神社間観光道路開通 ・筑波駅～筑波山神社登山道路開通 ・筑波スカイライン完成 ・つつじが丘に大駐車場完成 ・表筑波スカイライン完成 ・パープルライン完成 ・筑波鉄道廃止
2000		・筑波町がつくば市に編入	・鉄道空白期間
2010	・山ガールブーム ・サイエンスツアー開始 ・登山客減少	・登山客増加による来訪者増	・TX(秋葉原～つくば間)開通 ・圏央道開通（つくばJCT-つくば中央IC間）

1) 黎明期：門前町成立期

筑波山登拝者の増加にあわせて、門前町が成立した。信仰登山とあわせて観光・遊山的な来訪者も増加して、登山道が整備されるとともに、旅籠屋や茶屋、土産物屋など観光・参拝者向けサービス施設が出現した。

2) 導入期：交通路発展期

この時期には、徒歩交通を前提とした六丁石段通りの宿場が衰退する一方で、鉄道の開業、ケーブルカーや自動車道路の開通に伴う交通手段の変化により、登山者が大幅に増加した。しかしながら日帰り客増大に比して宿泊者は減少し、宿泊施設は転廃業が続いた。

3) 発展期：モータリゼーションによる空間発展期

モータリゼーションの進展とあわせて、自動車による来訪者が大半を占めるようになった。筑波山は関東圏の日帰りレクリエーション地域の一つとして、他の観光地域との競合にさらされ、観光客における筑波山の中心性は低下した。一方で観光目的地が山麓やつつじが丘周辺へと拡大し、筑波山来訪の目的も多様化が進んだ。深田久弥による日本百名山への選定や、つくば万博の開催(1985年)を契機に筑波山の知名度は向上した。

4) 衰退期：鉄道の空白と観光衰退期

筑波鉄道の廃止(1987年)を受け、筑波山周辺地域は鉄道の空白地帯となった。門前町の衰退はさらに顕著となり、観光衰退期を迎えた。

5) 再編期：TX開業、圏央道開通による再編期

東京(秋葉原)とつくば市中心部を結ぶ高速鉄道の開業や高速道路(圏央道)の開通など交通利便性の向上に加えて、トレッキングブームや山ガールの出現といった社会的背景もあいまって登山者は回復した。しかしながら、門前町は登山客のゲートウェイとしての機能は有していない。筑波山登山とつくば市観光との結びつきもみられる

ようになった。

V-2 観光関連アクターの関係性とその変化

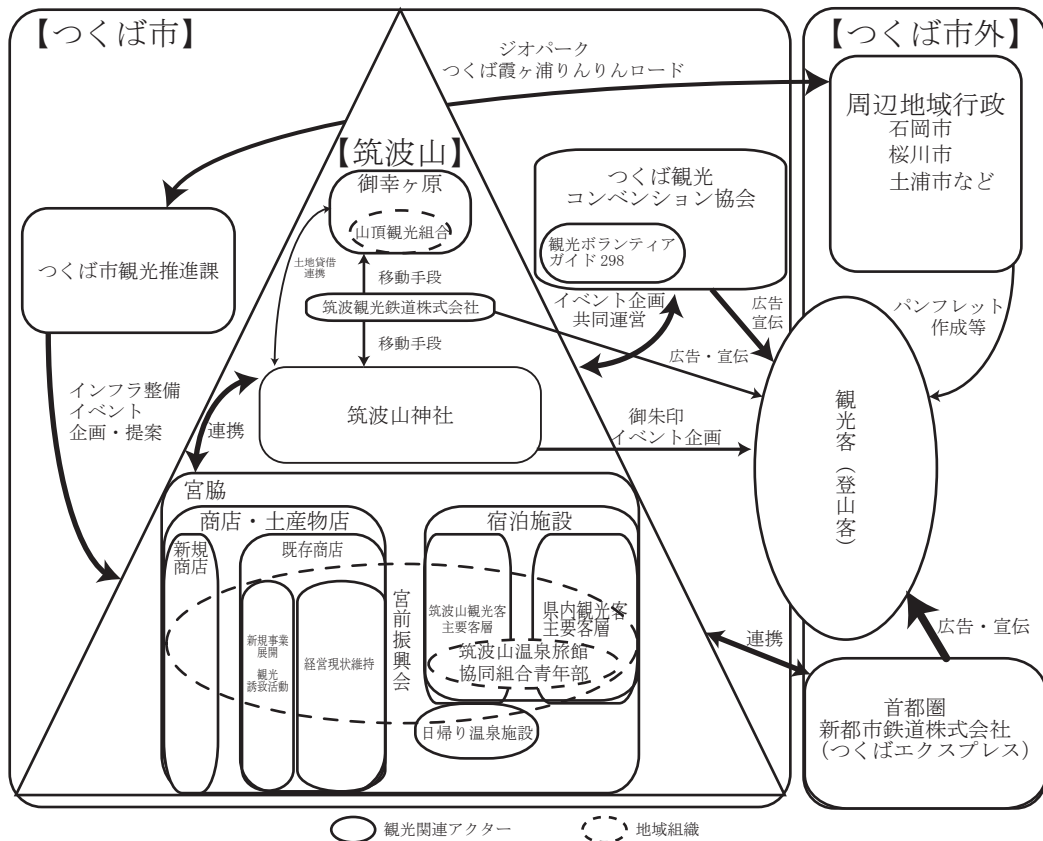
戦後から1990年代における筑波山観光空間では、古くから存在した筑波山観光組合や筑波山旅館組合が観光業における中心的存在であった。これらの組合は、門前町に存在する土産物店や宿泊施設経営者により組織されている。組合をはじめとする門前町自体が主導で観光誘致やイベント運営を行っていたことから長期間、観光空間も筑波山内部で完結していたとされる。

しかし2000年以降は観光空間が広域化し、新たな観光関連アクターが出現した(第23図)。以下、観光空間やアクターの関係性を捉えるにあたり、象徴的な三つのアクターに関して述べる。

第一に、首都圏新都市鉄道株式会社である。該社はTXの運営会社であり、2005年の開通に伴い、都心からの観光者誘致活動を行った。具体的に筑波山の広告活動に加え、「筑波山きっぷ」や、登山客向けの「筑波山あるきっぷ」の販売である。また、宮脇地区の商店・宿泊施設へ協賛を募り、購入切符には特典を付けて観光者が門前町で買い物をする契機となるようなサービスを実施している。

第二に、つくば観光コンベンション協会である。当協会は組織改編を経て、2013年に現在の運営形態となり、現在の観光関連事業の中心的存在となっている。ホームページを通じての筑波山地域の広告・宣伝はもとより、「ガマ祭り」などのイベント企画や運営を行う。また、観光ボランティアガイドを神社麓に常駐させ、観光者へ筑波山の歴史や自然、筑波山麓(北条・小田・神郡など)の案内を無料で行う。このような活動は、行政や宮前振興会などの筑波山観光地域内諸組織と連携をとりながら行っていることも大きな特徴である。

第三に、つくば市以外の周辺地域行政である。筑波山周辺に、つくば霞ヶ浦りんりんロードが整備されたことで、現在筑波山には全国から自転車で来訪する観光者が増加している。また、2016年



第23図 観光関連アクターの相互関係

注) 矢印の太さは、アクター間の連携の強さや他アクターへの影響度の強さを表す。

(聞き取り調査より作成)

には「筑波山地域ジオパーク」が認定されたことで、今後周辺都市がより広範囲な観光空間の一部として、筑波山地域を広報していくであろう。

以上のような新規外部アクターの出現により、筑波山を訪れる観光者は多様化しているといえよう。その一方で、これらのアクターは個々で観光者の誘致活動を行う傾向があり、門前町自体の観光業務に直接携わることはない。そのため、門前町内部の観光形態の変化はみられず、現在でも多くの店で古くからの観光形態が継続されている。そもそも、宮脇地区は居住地としての性格も兼ね備えた地域である。そのため、地域に根差さない広範囲にわたる観光誘致活動が外部アクター主導で行われることは、門前町の取り組みや業務形態と開きが出てしまっていることが考えられる。こ

れにより、多くの門前町の土産物店が、観光受け入れ意識を低下させていることが聞き取り調査を踏まえて考察することができる。

このような、地域内に居住する人々が観光空間を作りあげる筑波山門前町においては、「地域内諸組織」の活動が今後より重要視されるであろう。地域内諸組織の結成は、これまで存在しなかった門前町内の土産物店・宿泊施設同士でのつながりを生み出している。また、行政やつくば観光コンベンション協会などの外部アクターと積極的に連携をとり、店舗やアクター間の壁を越えた活動も盛んである。各アクターが互いに情報を共有しながら「筑波山」という観光空間・ブランドをいかに広報し、観光者や登山客の変化へも対応していくことが重要である。

Ⅵ おわりにー持続的な観光空間の形成に向けての課題

以上、本研究では、山岳とそれに付随した門前町を有する地域がいかにして観光空間としての性格を有するようになり、またどのように変容したのかを明らかにした。その際の視点として、本研究では、山岳と門前町の二つの空間スケールを想定し、それぞれのスケールでの各アクターの動向およびそれらの関係性に着目した。本稿のまとめとして、持続的な観光空間の形成に向けた課題の指摘を通して、結びとしたい。

これまでに述べてきたように、バブル期やTXの開業などで一時は観光者が増加した筑波山地域も、現在は観光者数の維持や増加に対する課題が山積している。特に、筑波山神社参道周辺では、観光業を営む経営者の高齢化に伴う後継者不足が目立っている。複数の世代にわたって経営してきた飲食店や土産物店、その他店舗等においても、後継者が決まっている店舗と決まっていない店舗があり、全体では後継者が決まっていない店舗の方が多い。後継者が決まっている店舗でも、その多くは現在の経営者の親族である。後継者が現在離れたところに居住している場合は、週末や長期休暇の際に手伝いに帰ってくることもある。一方で、後継者が決まっていない店舗においては、現在の経営者を最後に、終了次第店舗を閉めるという回答が多く得られたため、今後は観光業に関連する店舗は減少していくことが考えられる。

しかし、そのような状態が進行すると筑波山神社周辺では空き家・空き店舗の増加につながる。さらに、人通りの減少によって景観が寂れるだけでなく、治安が悪化するという懸念もある。このような事態を防ぐための後継者確保は、宮脇地区内だけでは不十分で、つくば市や近隣市町村など周辺地域からの経営者の新規参入も受け入れていく必要がある。だが、経営者として新規参入する場合は、移住も含めて新たな環境への適応力も求められ、1人確保するだけでも容易ではない。

また、経営者としての新規参入は、現存する店

舗の後継者という形態でなくとも、新たに店舗を開業させる形態での新規参入という方法もある。近年では、実際に宮脇地区に地区外からの経営者が観光者向けの飲食店を開業させた例があり、現在では観光者だけでなく地元の常連客も来店するようになった。しかし、このような事例はまだ少なく、宮脇地区への早期の新規参入が求められる。

近年は登山ブームがおこり、登山を目的として筑波山を訪れる観光者の割合も増えている。筑波山は登山しやすく、手軽に楽しめるという利点がある。しかし、登山客は登山がメインであることが多く、このような場合は筑波山神社への参拝や土産の購入など、登山以外の観光行動がみられないことも珍しくない。土産物店や宿泊施設経営者への聞き取り調査でも、筑波山へ登山目的で訪れた観光者はあまり土産物店に立ち寄ることが無い（立ち寄ったとしてもお金を落とすことが少ない）ことや、県外から訪れても宿泊せず、日帰りで訪れる観光者が多いという結果が得られている。日帰りが多くなったのは現代的な観光形態の特徴でもあり、日帰りである分、店舗を多くまわることが難しい。今後適切な誘客戦略を検討することが必要である。有効な誘客戦略の一つとして、筑波山地域のジオパークを活かすことが考えられる。これまで述べてきたように、筑波山地域のジオパークは地形・地質学的に貴重な見どころが多いだけでなく、筑波山周辺市町村の歴史や文化なども楽しめるという特徴がある。つくば市に点在する研究機関と協力して学術的な充実したイベントをはじめ、農業や産業を体験できるイベントもこれまでに多く企画され、今後も新たな企画に向けてジオパークを推進している動きがある。観光者や観光形態の多様化に対応すべく、ジオパークをきっかけに、これまで以上に筑波山周辺の市町村間でもつながりが強くなることが求められる。また、TXや圏央道など近年の交通アクセスの向上で、広域的な距離感が縮まることが期待される。このように多様性のある観光空間のポテンシャルを広域的に有することは、観光空間の形成に前向きにとらえることが出来る。

このポテンシャルを活かすためには行政だけでなく、市民の参入も必要不可欠である。特に、ジオパーク地域周辺に長く居住されている住民は、実際の現場に詳しい住民も多く、行政だけでは不十分な取り組みや課題の改善に向けて住民から取り入れた意見が後押しすることも考えられる。現在では、ジオパークに関して行政と住戸が意見を交換し合う会の設置や、誰でも参加できる公開講座を開講するなど、行政と住民との交流がみられるが、今後も積極的に行い、維持していくことが必要である。また、実際にジオツアーを楽しんだ

参加者からの意見は説得力があるので、ジオツアー中にディスカッションを行うなどの交流の機会を設けるのも有効な手段だと考えられる。

前述のような行政と住民の地域内交流における結び付きに加えて、行政同士が相互に協力することは、より広域的な結び付きにつながる。筑波山地域のジオパークは複数の市にまたがる広域ジオパークであることから、地域内と広域的両方面から活動していくことが、持続的な観光空間形成への課題を減らすことにつながると考えられよう。

現地調査に際し、つくば市観光推進課およびジオパーク室の皆様、つくば市観光コンベンション協会の星野様、筑波山神社宮司岩佐様、権欄宜八木下様、筑波山宮前振興会会長の神田様をはじめとする商店・土産物店・宿泊施設経営者の皆様から多大なるご協力を賜りました。また本稿の執筆にあたって筑波大学生命環境系人文地理学分野の先生方からご指導いただきました。さらに論文の取りまとめにあたって、本学院生の本多広樹氏、川添航氏、佐藤壮太氏、張瑞雪氏には惜しみないご助力をいただきました。末筆ながら以上を記して感謝いたします。なお、本研究の実施にあたっては、旅の文化研究所第24回公募研究プロジェクト（採択課題「日本の山岳空間における登山とツーリズム－登山イメージの変化と地域の対応に関する地理学的分析から－」）の助成の一部を使用した。また、本稿の骨子は2017年9月に行われた日本地理学会2017年秋季学術大会（於：三重大学津キャンパス）にて発表した。

【注】

- 1) 伝承は、神々の親である神が子の神を訪ね歩いている際、子である富士の神に新嘗の物忌を理由に宿泊を断られ、同じく子である筑波の神には歓待されたというものである。このとき、親神は富士の神に年中雪と霜が積もり、人も登らず食物も奉られなくなれと呪い、反対に筑波の神には人々が大いに集まり飲み食いすることが絶えず続くと寿いだとしている。歌垣をはじめ、古代、筑波山が人々の集まる場であったことが類推される神話である。
- 2) 内閣文庫所蔵。国立公文書デジタルアーカイブにて閲覧可能である。「常陸国筑波山上画図」<https://www.digital.archives.go.jp/das/meta/M10000000000000000592.html>（最終閲覧日：2017年12月3日）、常陸国筑波山下画図」<https://www.digital.archives.go.jp/das/meta/M10000000000000000593.html>（最終閲覧日：2017年12月3日）。
- 3) 当時の乗合自動車というのはバスではなく、主として輸入車を使ったタクシー業のことをさした。
- 4) 第2次つくば市観光基本計画による。
- 5) 2017年現在、六所は臼井に含まれており、臼井から2人選出されている。
- 6) 夜間運行は17：00～21：00の間である。
- 7) 御幸ヶ原地区に立地する8軒の商店を指す。

【文 献】

- 浅香幸雄（1959）：信仰登山集落の形成（第1報）－木曾御嶽の場合－。東京教育大学地理学研究報告，Ⅲ，183-243。
- 浅香幸雄（1963）：富士北口の上吉田・川口の御師町の形態とその構造－信仰登山集落の形成（第2報）－。東京教育大学地理学研究報告，Ⅶ，55-82。

- 浅香幸雄 (1968) : 大山信仰登山集落形成の基盤. 東京教育大学地理学研究報告, **XI**, 179-196.
- 有賀密夫 (1971) : 大山門前町の研究. 地域研究, **14**, 17-28.
- 有賀密夫 (1972) : 出羽三山を中心とする山麓登拝集落. 地域研究, **16**, 37-42.
- 有賀密夫 (1974) : 富士山を中心とする山麓信仰集落. 地域研究, **21**, 12-25.
- 石森秀三 (2001) : 内発的観光開発と自律的観光. 国立民族学博物館調査報告, **21**, 5-19.
- 岩鼻通明 (1981) : 観光化にともなう山岳宗教集落戸隠の変貌. 人文地理, **33**, 74-88.
- 岩鼻通明 (1983) : 出羽三山をめぐる山岳宗教集落. 地理学評論, **56**, 535-552.
- 岩鼻通明 (1993) : 観光化にともなう山岳宗教集落戸隠の変貌 (第2報). 山形大学紀要 (社会科学), **23**, 179-198.
- 岩鼻通明 (1999) : 観光化にともなう山岳宗教集落戸隠の変貌 (第3報). 季刊地理学, **51**, 19-27.
- 植田宏昭・小埜祐人・大庭雅道・井上知栄・釜江陽一・池上久通・竹内 茜・石井直貴 (2011) : 筑波山の東西南北4斜面における高度100m間隔での通年観測－斜面温暖帯に着目して－. 天気, **58**, 777-784.
- 卯田卓矢 (2014) : 観光地としての都市近郊霊山の形成と展開プロセス－開発資本の動向を中心として－. 旅の文化研究所研究報告, **24**, 1-18.
- 大塚周作 (1918) : 『筑波登山之友：一名・筑波山詳解, 2』.
- 大町桂月 (1909) : 『関東の山水』博文館.
- 大町桂月 (1912) : 『筆のすさび』富山房.
- 小椋弘佳・樋口 秀 (2016) 国立公園内に位置する大山寺集落と御岳山山上集落の土地利用管理に関する研究. 日本建築学会計画系論文集, **81**, 921-931.
- 尾越麻美・浅野純一郎 (2013) : 門前町都市の近代都市形成過程に関する研究. 日本建築学会技術報告集, **19**, 725-730.
- 河田 楨 (1923) : 『一日二日山の旅』自彊館書店.
- 関東鉄道株式会社 (1993) : 『関東鉄道七十年史』.
- 木村 繁 (1959) : 『筑波山』筑波書林.
- 呉羽正昭 (2014) : 日本の観光地理学研究におけるフィールドワークに関する一考察. 人文地理学研究, **34**, 95-106.
- 小泉武栄 (2011) : ジオエコツーリズムの提唱とジオパークによる地域振興・人材育成. 地学雑誌, **120**, 761-774.
- 小堀貴亮 (2001) : 宇佐神宮における門前町の地域生態と観光動態. 地域社会研究, **4**, 19-33.
- 佐々木博 (1983) : 筑波山門前町の立地生態. 人文地理学研究, **7**, 185-208.
- 城真由美 (2002) : 筑波山麓の講. 西郊民族, **179**, 35-42.
- 鈴木道郎 (1966) : 明治初期における相模大山御師の経済生活. 地理学評論, **39**, 656-664.
- 高橋宏光・郷原裕生・片柳 勉 (2016) : 大津市上坂本における土地利用の変化とまちづくり. 地球環境研究, **18**, 115-121.
- 田中啓爾 (1933) : 門前町 (信仰集落) としての成田町. 田中啓爾『地理学論文集』449-515, 古今書院.
- 築山秀夫・矢部拓也 (2016) : 地方都市におけるリノベーションまちづくりの展開－長野市善光寺門前を事例として－. 長野県短期大学紀要, **71**, 57-70.
- 筑波町史編纂委員会 (1989) : 『筑波町史 上巻』.
- 筑波町史編纂専門委員会 (1990) : 『筑波町史 下巻』.
- 外村剛久 (2013) : 持続可能性指標による観光地の持続可能性評価とまちづくり施策における観光資源の活用・保全に関する研究. 法政大学大学院デザイン工学研究科紀要, **2**, 1-8.
- 長野 覚 (1989) : 日本人の山岳信仰に基づく聖域観による自然護持 (その1). 駒沢地理, **25**, 51-76.
- 長野 覚 (1990) : 日本人の山岳信仰に基づく聖域観による自然護持 (その2)－紀伊半島・大峰山系の事例－. 駒沢地理, **26**, 67-87.
- 長野 覚 (1992) : 日本人の山岳信仰に基づく聖域観による自然護持 (その3)－その地域的諸相－. 駒

- 沢大学文学部研究紀要, **50**, 1-70.
- 西海賢二 (1979): 筑波山信仰の展開とダイドウ講. 宮田 登・宮本袈裟雄編『日光山と関東の修験道』242-263, 名著出版.
- 西海賢二 (2012): 『筑波山と山岳信仰－諸集団の成立と展開－』 崙書房ふるさと文庫.
- 西田彦一 (1975): 交通路と登拝集落に関する若干の考察－大峰山麓奥吉野の場合－. 山口平四郎先生定年退官記念事業会編『地域と交通』147-164, 大明堂.
- 西邑雅未・黒田乃生 (2015): 筑波山における観光ルートの変遷. ランドスケープ研究, **78**, 587-592.
- 日本交通公社出版事業局 (1980): 『月間るるぶ』.
- 橋本暁子・齋藤謙司・亀川星二・西田あゆみ・津田憲吾・井口 梓・松井圭介 (2010): 成田山新勝寺門前町における街並み整備と商業空間の変容. 地域研究年報, **32**, 1-41.
- 服部陽太・杉本興運・太田 慧・菊地俊夫 (2016): 箱根・元箱根における観光と空間構成. 観光科学研究, **9**, 59-66.
- 早川 公 (2015): 筑波山麓地域における「まちづくり」の展開－地域を編集するプロセスに関わる人々－. 前川啓治編『筑波山から学ぶ－「とき」を想像・創造する』140-164, 丸善出版.
- 原田伴彦 (1957): 戦国時代前後の諏訪門前都市集落. 原田伴彦『日本封建都市研究』257-277, 東京大学出版会.
- 藤岡謙二郎 (1948): 寺内町の研究. 人文地理, **1**, 41-47.
- 藤本利治 (1970): 『門前町』 古今書院.
- 堀 正岳・植田宏昭・野原大輔 (2006): 筑波山西側斜面における斜面温暖帯の発生頻度と時間変化特性. 地理学評論, **79**, 26-38.
- 前田 勇・橋本俊哉 (2015): 観光の日本史. 前田 勇編著『新現代観光総論』27-36, 学文社.
- 松井圭介 (1993): 日本における宗教地理学の展開. 人文地理, **45**, 75-93.
- 松井圭介・卯田卓矢 (2015): 近世期における富士山信仰とツーリズム. 地学雑誌, **124**, 895-915.
- 森重昌之 (2009): 観光を通じた地域コミュニティの活性化の可能性: 地域主導型観光の視点から見たタ張市の観光政策の評価. 観光創造研究, **5**, 1-20.
- 八郷町史編纂委員会 (2005): 『八郷町史』.
- 山形俊之 (2013): 平成登山ブームに関する一考察. 湖北紀要, **34**, 189-204.
- ヤマケイ登山総合研究所 (2017): 『登山白書2017』 山と溪谷社.
- 湯本 桂・後藤 治・安藤邦廣・藤川昌樹・堀江 亨・黒坂貴裕・中野茂夫 (2005): 近世の筑波山門前における参詣道沿いの町並の変遷について－二階建て家屋を中心に－. 日本建築学会計画系論文集, **598**, 227-233.
- 吉野正敏 (1982): 筑波研究学園都市の低温と接地逆転層の発達. 筑波大学水理実験センター報告, **6**, 35-44.
- 読売新聞水戸支局編 (1993): 『筑波山はいま－人々の暮らしと自然』 筑波書林.
- Ueda, H., Hori, M.E. and Nohara D. (2003): Observational study of the thermal belt over the slope of Mt. Tsukuba. *Journal of the Meteorological Society of Japan*, **81**, 1283-1288.